

# 外部評価報告書

平成 27 年 3 月

富山県立大学  
工学部教養教育

# 目 次

## I 外部評価の方法

外部評価の方法	1
書面調査票（様式）	3

## II 書面調査

全項目の評点について	7
「中項目ごとのご意見・ご助言」及び「大項目ごとのコメント」	8

## III 訪問調査

訪問調査	39
------	----

## IV 外部評価を受けて

外部評価を受けて	65
----------	----

## V その他

参考資料	69
------	----



# I 外部評価の方法

## 外部評価の方法

次の外部評価委員により、書面調査及び訪問調査によって行った（方法の詳細は工学部の外部評価報告書を参照）。

### 1 教養教育外部評価委員

主査	表 實	慶應義塾大学名誉教授・慶應義塾大学自然科学研究教育センター共同 研究員（元 東北公益文科大学副学長）
委員	大谷 芳夫	京都工芸繊維大学副学長・附属図書館長（元 富山県立大学助教授）
委員	川腰 善一	富山県立富山中部高等学校 校長
委員	長谷部裕樹	株式会社オリジネーター 代表取締役社長

### 2 書面調査票等

- ・様式は別添のとおり
- ・学部共通の資料に併せ、次の資料も外部評価委員に送付  
『Virginibus Puerisque 若き人々のためにー「読書マラソン」への誘い』  
第1版、第2版、第3版 各1冊

### 3 訪問調査スケジュール及び学内視察の視察箇所

平成26年（2014年）10月24日（金）13:10～15:00

場所：富山県立大学工学部教養教育学科会議室

次第：

13:10～13:13	主任教授挨拶
13:13～13:17	参加者紹介、委員紹介、視察スケジュール紹介
13:17～13:20	主査挨拶
13:20～14:05	学内視察 (教員室、学生相談室、アクティブラーニング室、物理学実験室)
14:05～14:25	質疑応答
14:25～	講評について委員打ち合わせ（於・別室 学科連絡室） 主査以外の委員による講評
～15:05	主査による総括講評
15:05～15:08	主任挨拶
15:08～15:30	主査：休憩、全体会議会場に移動（7階教授会室） 主査以外の委員：全体会議にオブザーバー参加（任意）
	終了・解散

<外部評価委員へ送付した、記述に当たっての注意事項等>

## 書面調査に関して

### 1 「項目」とは

・本学から送付しました「自己点検評価報告書」の目次をご覧ください。

・例えば、「2 教育研究組織」

「2-2 学科、専攻の運営組織と活動状況」

「2-2-1 学科会議」、と記載されてます。

この「2 教育研究組織」の部分で大項目、「2-2 学科、専攻の運営組織と活動状況」の部分の中項目、「2-2-1 学科会議」の部分の小項目、と分類してま

す。

### 2 評点について

・中項目ごとに評点をつけていただきます。

・「自己点検評価報告書」やその他資料に基づいてご判断ください。

・評点は次のような目安でお願いします。

5 : 優れている	o r	適切である
4 : やや優れている	o r	ほぼ適切である
3 : 普通	o r	どちらとも言えない
2 : やや劣っている	o r	あまり適切とは言えない
1 : 劣っている	o r	適切でない

3 中項目ごとにご意見・ご助言をお願いします。特に評点が「3」以外の場合は、その理由を含めて記述をお願いします。

4 大項目ごとにコメントをお願いします（中項目が1つしかない大項目の場合は記入を省略されて結構です。）。

5 評価に当たって、疑問点やより詳細な資料が必要な場合等もあるかと思いますが、その際は次の者が窓口となっておりますので、メール等でお伝えください。また、訪問調査関係につきましても同様にご質問等を承りますので、よろしくをお願いします。

<事務局送付先>

◎8月29日(金)までに、事務局へ、ご回答願います。

富山県立大学 外部評価 書面調査票

&lt;外部評価委員へ送付した、書面調査票様式(工学部分)&gt;

## &lt;教養教育&gt;

委員御氏名

大項目	中項目	中項目の 評点 (5段階)	中項目ごとのご意見・ご助言	大項目ごとのコメント等
1 学習・教育 目標	1-1 学習・教育目標等			
2 教育研究組 織	2-1 学科の構成			
	2-2 学科の運営組織と 活動状況			
3 教員及び教育 支援者	3-1 教員構成			
	3-2 教育補助者の活用			
4 学生の受入	4-1 入学者受入方針 (アドミッション・ ポリシー)の 明確化と、それに 沿った学生の受入			
	4-2 入学試験			

I 外部評価の方法

大項目	中項目	中項目の 評点 (5段階)	中項目ごとのご意見・ご助言	大項目ごとのコメント等
5 教育内容及び方法 (5-1~5-4は、 学科が対象)	5-1 教育課程の編成・ 実施方針の明確化			
	5-2 教育課程			
	5-3 授業形態、学習指 導			
	5-4 学位授与方針 (ディプロマ・ポ リシー)の明確化 と、それに従った 成績評価、単位認 定等			
6 学習の成果	6-1 学習の成果・効果			
	6-2 卒業(修了)後の 進路状況等と学習 の成果			
7 施設・設備 及び学習支 援	7-1 研究室、実験・実 習室等の整備、利 用状況			
	7-2 学習支援			
	7-3 進学就職支援			



I 外部評価の方法

大項目	中項目	中項目の 評点 (5段階)	中項目ごとのご意見・ご助言	大項目ごとのコメント等
8 教育の内部 質保証シス テム	8-1 授業アンケートの 教育改善への活用			
	8-2 卒業生、就職先等 の意見の教育改善 への活用			
	8-3 FD活動と教育改 善への活用			
	8-4 教育内容充実のた めの取り組み			
	8-5 J A B E Eの取り 組み			
9 教育情報等 の公表	9-1 教育情報等の公表			
10 研究活動	10-1 教員の研究分野及 び内容			
	10-2 研究成果の発表			
	10-3 学会・協会活動へ の参加			
	10-4 学会・協会活動に よる受賞			

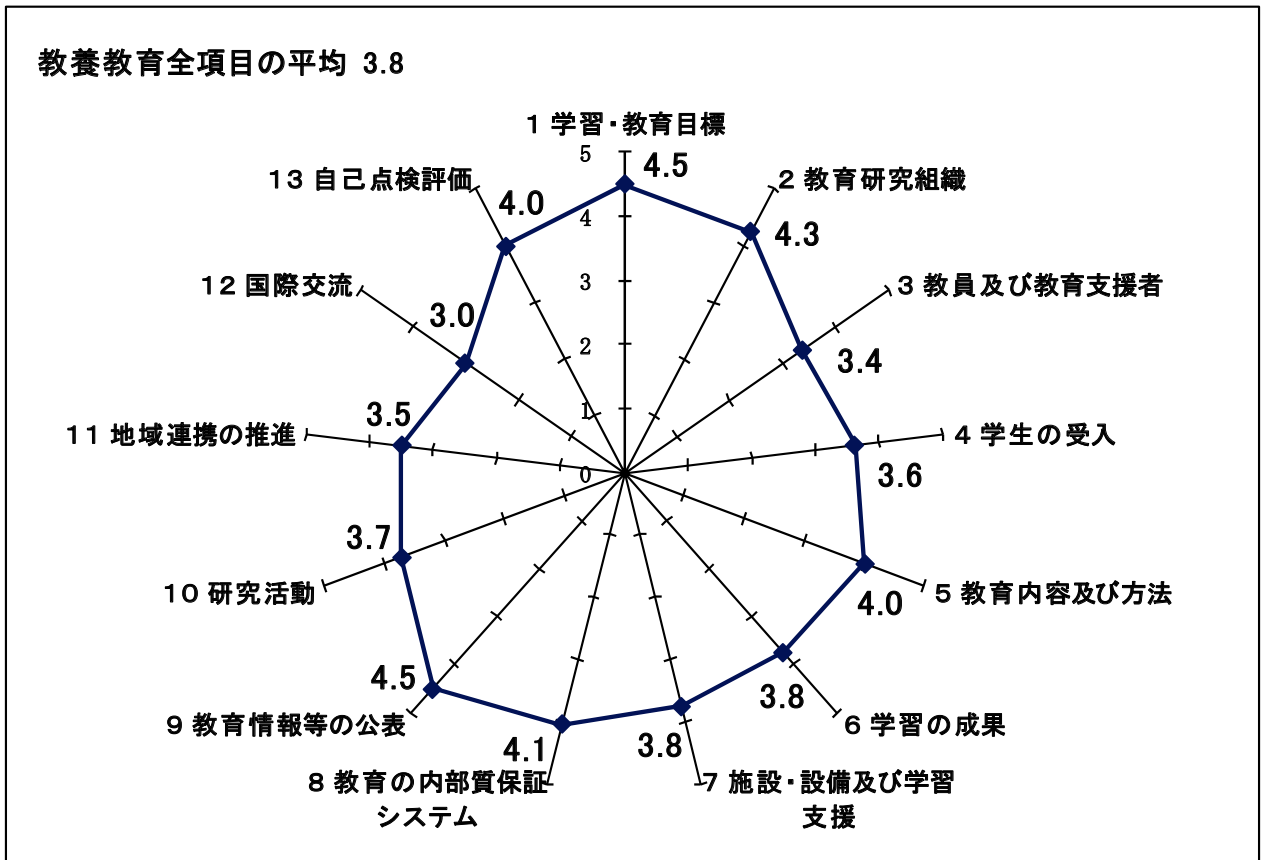
## I 外部評価の方法

大項目	中項目	中項目の 評点 (5段階)	中項目ごとのご意見・ご助言	大項目ごとのコメント等
	10-5 外部研究資金			
	10-6 発明・特許等			
11 地域連携の 推進	11-1 共同研究等の受入 (共同研究、受託 研究、奨励寄附 金)			
	11-2 産学交流			
	11-3 生涯学習・地域交 流			
	11-4 審議会委員等への 就任			
12 国際交流	12-1 教員の国際交流			
	12-2 留学生の受入			
13 自己点検評 価	13-1 自己点検評価の取 り組み			

## II 書 面 調 査

書面調査の結果について（教養教育）

I 全項目の評点について



大項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
1	5.0	5.0	4.0	4.0	4.5
2	4.5	4.5	5.0	3.0	4.3
3	3.0	3.5	3.5	3.5	3.4
4	3.5	3.5	4.0	3.5	3.6
5	3.3	4.8	4.3	3.8	4.0
6	3.0	3.5	4.5	4.0	3.8
7	3.7	3.3	4.0	4.0	3.8
8	3.8	4.4	4.0	4.0	4.1
9	4.0	4.0	5.0	5.0	4.5
10	3.5	3.5	4.2	3.7	3.7
11	3.5	3.3	3.8	3.5	3.5
12	3.0	3.5	3.5	2.0	3.0
13	3.0	4.0	4.0	5.0	4.0
平均	3.6	3.9	4.1	3.8	3.8

## II 「中項目ごとのご意見・ご助言」及び「大項目ごとのコメント」

## 1 学習・教育目標

項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
1-1	5	5	4	4	4.5

## 1-1 学習・教育目標等

## 表 主査

- ・教養教育の教育理念及び教育目標が示されている点並びに教育目標の中に専門教育との関連が示されている点が評価できる。

## 大谷委員

- ・教養教育に関しては、学部専門5学科と並んで、独自の教育理念・教育目標を明確にしている。また、その内容は履修の手引き・大学ホームページ等で広く周知されており、適切であると評価する。

## 川腰委員

- ・教養教育の重要性が明記されており、ほぼ適切である。今後、もう少しグローバルな視点を加味すべきではないか。

## 長谷部委員

- ・ゆとり教育の影響で、大学の教養課程にも多大な影響があると思われる中、明確な目標を持って指導されていると思われる。

## 「1 学習・教育目標」についてのコメント

## 表 主査

- ・教養教育の位置づけは、大学の教育理念を示す重要な要素となるものであり、その意味で教養教育の理念が明確に述べられている点は高く評価できる。

## 2 教育研究組織

項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
2-1	5	5	5	3	4.5
2-2	4	4	5	3	4.0
平均	4.5	4.5	5.0	3.0	4.3

### 2-1 学科、専攻の構成

表 主査

- ・教養教育を担う体制が整えられていて、かつ他の5学科と同様の位置づけがなされていることは評価できる。

大谷委員

- ・学部専任教員108名のうち、約1/5にあたる20名の教員を確保・配置し、各教員の専門分野も多様な領域にわたっている。これにより、幅広くバランスの良い教養教育が可能な体制を確保している。

川腰委員

- ・適切である。

長谷部委員

- ・外国人との交流が増える中、外国語力及び理系学習者が苦手とする歴史学（特に近現代史）については、必須の科目として改善をしていただきたい。

### 2-2 学科、専攻の運営組織と活動状況

表 主査

- ・分野毎に人事選考基準が定められていることは評価できるが、選考に当たっては該当分野以外から1名が参考人として加わることが望ましい。

大谷委員

- ・教養教育学科会議は、規定に基づき全員参加の下に定期的に行われ、情報共有や学科としての意思統一が図られている。人事教員会議においては、教授を中心に、必要に応じて関連分野の准教授・講師の協力の下、個別分野別に定められた人事基準に従って適切に選考が行われている。

川腰委員

- ・適切である。

## 「2 教育研究組織」についてのコメント

表 主査

- ・教養教育としての学科会議が定期的および臨時的に開催されていることは、研究分野が多岐にわたる構成員からなる組織の意思疎通にとって、重要な役割を果たしていると評価できる。

大谷委員

- ・大学設置基準改正以後も、教養教育の体制を堅持し、教育と組織運営にあたってきた点は高く評価できる。教養教育の重要性が再認識されつつある現在、この体制を維持・発展させ、さらに社会の要請に応える教養教育を実施していくことが望まれる。

川腰委員

- ・適切である。

長谷部委員

- ・大学の教養課程は、高校の延長線である。受験によって損なわれた勉学の偏りや、体力の低下を回復する時期にもなる。その中で、より良いカリキュラムの提供が望まれる。

### 3 教員及び教育支援者

項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
3-1	3	3	3	3	3.0
3-2	3	4	4	4	3.8
平均	3.0	3.5	3.5	3.5	3.4

#### 3-1 教員構成

表 主査

- ・改善が必要な点とその改善の方策は、既に自己点検評価報告書に指摘されているが、さらに新規採用の際の分野との関連で、将来設計に向けた議論をする場があることが望ましい。

大谷委員

- ・専任教員の年齢構成は、40才代以下が8名と全体の半数未満であり、若手教員数の拡充が望まれる。今後退職する教員を見込んだ長期的な採用人事計画を策定する必要がある。また、女性教員は構成員の10%と少なく、工科系大学とはいえ、女性教員の比率をより向上させることが必要である。教育内容と専任教員数から考えて、非常勤講師への依存率が高いことは現実的な対応として妥当なものと評価する。

川腰委員

- ・学生数が増える中で教員数はほとんど変わらず、限られた数の専任教員でバランスよくカバーしている。しかしながら、教員の年齢が高く、構成はアンバランスである。また、非常勤講師への依存率も高い。

長谷部委員

- ・既に論議されているようであるが、教員の年齢・性別については改善の余地があると思われる。

#### 3-2 教育補助者の活用

表 主査

- ・実験・演習科目での大学院生のTA採用は、大学院生の教育の場としても有効である。

大谷委員

- ・TAの経験は、大学院生への教育効果の点からも推奨されるべきであり、適切に運用されていると評価する。TA自身がその効果を確認するためにも、事前研修だけでなく、事後に報告書等を提出させ、自己評価を求めるなどの方策を検討してはどうかと考える。

川腰委員

- ・TA制度が適切に運用されている。高大連携事業などの増加に伴い、さらなる充実が望まれる。



長谷部委員

- ・上記のような問題点の解決に向け補助者の利用は重要である。

### 「3 教員及び教育支援者」についてのコメント

表 主査

- ・教養教育は大きく分けて、大学生としての基本的な素養（自然科学・人文科学・社会科学等）の育成を目指す教育（リベラル・アーツ）・専門科目の基礎を育成する教育・外国語教育の3分野から構成されているが、それに応じた教員構成のあり方に関する人事計画を議論することが重要である。

大谷委員

- ・専任教員の年齢構成と女性教員比率の問題は、多くの大学が抱える課題であり、短期的な対応は困難なものである。教養教育内だけでなく、専門学科も含めた大学全体の課題として、中長期的な戦略を策定することが望まれる。

川腰委員

- ・専任教員の増員が難しい中、教育補助者の活用促進等が必要である。

長谷部委員

- ・多様なカリキュラムを提供しようと思えば、年齢・性別・国籍を超えた多様な人材の教員構成が必要である。

#### 4 学生の受入

項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
4-1	3	3	4	4	3.5
4-2	4	4	4	3	3.8
平均	3.5	3.5	4.0	3.5	3.6

##### 4-1 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）の明確化と、それに沿った学生の受入

###### 表 主査

- ・アドミッション・ポリシーが明確に定められていることは評価できる。このポリシーが目標に留まることなく、実際にこれに沿った学生の受け入れがなされているか否かについての検証が必要である。

###### 大谷委員

- ・専門5学科共通のアドミッション・ポリシーが明確化され、教養教育として、それを受けた対応を行っている点は評価できる。一方で、資料1-1-A及び1-1-Bで示された教養教育の理念・目標と、本中項目で掲げられた受入方針との整合性がやや不明確である。

###### 川腰委員

- ・本学に入学を志して欲しい学生として「・・・理系の基礎学力がある」学生としているが、カリキュラム上、理系の基礎学力の養成を目指して十分な基礎科目を用意するなど、基礎学力の充実に力を入れざるを得ないところに、学生募集の難しさを感じる。

###### 長谷部委員

- ・地元公立大学としてのポリシーが明確である。また日本語表現法などの授業は、非常に共感の持てるプログラムである。

##### 4-2 入学試験

###### 表 主査

- ・入試業務での業務分担の公平化は重要な課題である。

###### 大谷委員

- ・入試・学生募集委員会での業務、及び入学試験実施関連業務において主要な役割を果たしている。

###### 川腰委員

- ・県立大学である以上、毎年、入学生に占める富山県出身者の割合は、大変気になるところである。推薦入試などで、一定の配慮をいただいているが、今後とも、富山県出身者の確保に尽力いただきたい。

#### 「4 学生の受入」についてのコメント

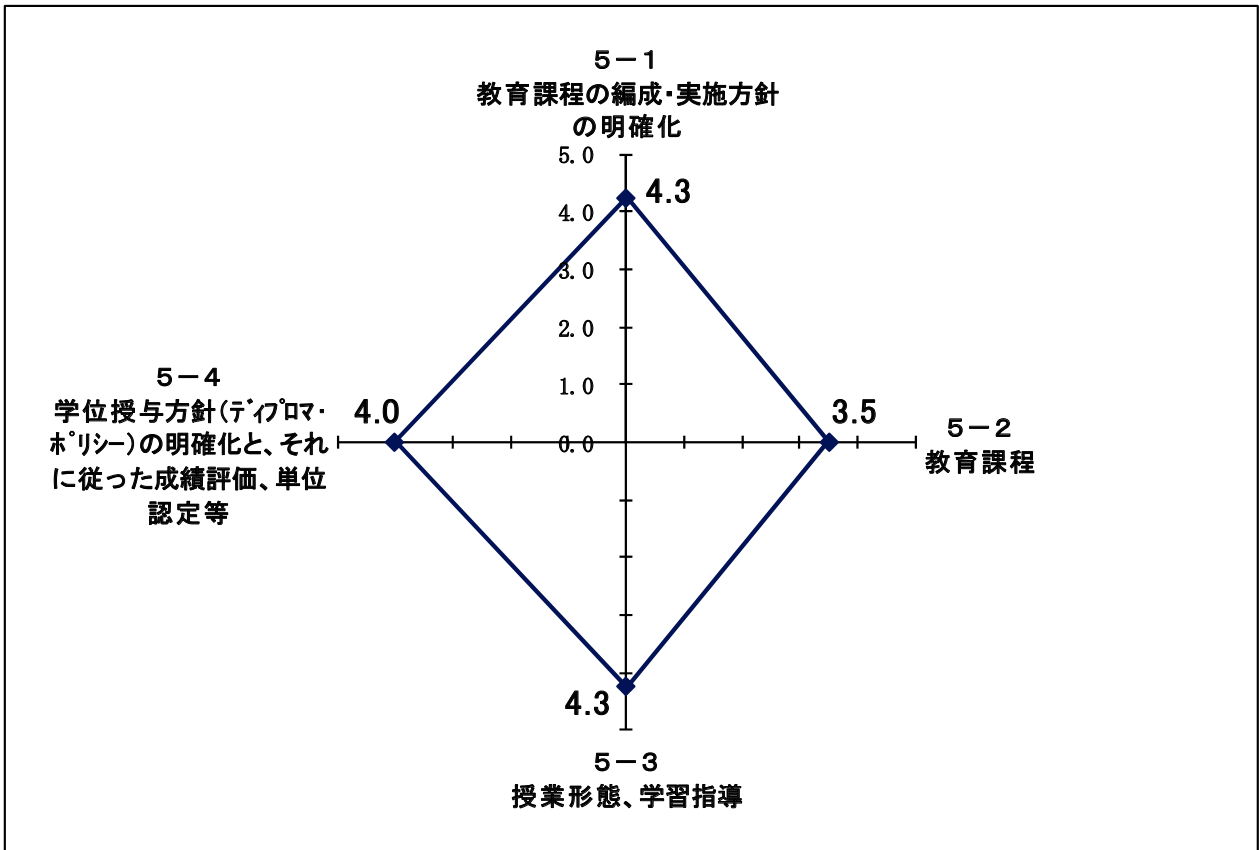
表 主査

- ・入試では、問題作成および採点の業務などで、教養教育の幾つかの分野の教員は、例年負担が大きくなりがちであることから、専門課程の教員も含めて負担の公平化を図ることが、入試におけるミスの防止というリスクマネジメントの観点からも重要である。

川腰委員

- ・しっかりとした基礎学力を有した学生の確保が望まれるが、一方で、県立大学として本県出身者の割合にも常に配慮が必要である。

5 教育内容及び方法 (5-1~5-4)



5-1 教育課程の編成・実施方針の明確化

表主査

- ・教養教育課程の科目が、総合科目・基礎科目・外国語科目群に分類されて体系化されていることはわかり易い。また、基礎科目に演習科目が設定されていることは、学生の基礎力育成の観点から評価できる。教養科目の履修が3年次まで可能であることも評価できる。

大谷委員

- ・教養教育の理念・目標に基づいて、幅広い分野の科目が体系的に提供されている。特に、工科大系大学にあって、人文社会科学系分野を中心とした総合科目を、高年次（3年次）にわたって履修するよう時間割編成を工夫している点が評価できる。

## 川腰委員

- ・高校の学習指導要領が見直されることなどにより、入学生の学力は変化してきている。教養教育は入学生の実態に応じて、教育課程の柔軟な見直しに努めていただきたい。

## 長谷部委員

- ・ゆとり教育世代の学生と教員との間の能力差を埋めるのは容易ではない。その中においての自己点検評価活動を通じて改善・工夫が見られる。

**5-2 教育課程**

## 表 主査

- ・専任教員の一人当たりの担当コマ数が少し多いことは、止むを得ない事情があるとは言え改善すべき点である。非常勤講師に依存する部分が多くなることは理解できるが、非常勤講師の資格等の質の保証は注意したい点である。卒業研究を担当する教員の存在は評価できる。

## 大谷委員

- ・平成18年度からの4学科体制以降、文科省GP事業採択、新学科開設、教員・学生アンケート実施などに基づき、機動的・継続的にカリキュラム改訂が行われてきている。基礎教育科目と専門科目との接続にも配慮がされている。一方で、少人数教育という方針の下、教員一人あたりの平均担当クラスが10を越えている。一部教員は卒業研究も担当しており、教育の負担がやや重いのではないかと思われる。

## 川腰委員

- ・学生の幅広いニーズに応えるため、大学コンソーシアム富山等との単位互換の一層の充実が望まれる。

## 長谷部委員

- ・ビックデータの活用で経済に与える影響など、教養課程において商業・経済などの教育をしっかり行って頂きたい。

**5-3 授業形態、学習指導**

## 表 主査

- ・数学、物理学、英語などの基礎学力が不足している学生への対応に、工夫と努力がなされていることは評価できる。

## 大谷委員

- ・教養ゼミから卒研配属に至る学部課程で、一貫して教員との緊密な関係が維持できる少人数ゼミが行われている点は高く評価できる。その他の授業に関しても、小規模大学の特色を生かしたきめ細かな工夫が行われている。

## 川腰委員

- ・数学などでの反転授業導入や、アクティブラーニングの一層の充実が望まれる。

長谷部委員

- ・英語、中国語教育のプログラムは良いと思う。また基礎学力の底上げについても学内としての努力、工夫が見られる。

#### 5-4 学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）の明確化と、それに従った成績評価、単位認定等

表 主査

- ・ディプロマ・ポリシーが明確に定められていることは評価できる。

大谷委員

- ・成績評価、単位認定に関しては、学生への周知、判定資料の保存、疑義申し立て制度の運用等、適切に実施されている。

川腰委員

- ・シラバスに評価の方法、評価の割合を明記し、学生に周知しているのは適切である。

#### 「5 教育内容及び方法」についてのコメント

表 主査

- ・いろいろな入試形態で入学した学生の入学後の成長状況にもよるが、基礎学力不足の学生の割合が入試形態によって差があるならば、入試のあり方を検討することも考えられる。その意味で、入学後の学生の成長状況に関する追跡調査は必要であろう（まだなされていないならば）。

大谷委員

- ・建学以来の方針である少人数教育体制を堅持し、語学、実験・演習科目、講義系科目のいずれにおいても丁寧な指導を行っている点は高く評価できる。一方で、科目・学生数の増加に伴う教育負担は増しており、教員が教育と研究をバランス良く遂行できる状況を確保することが望まれる。単位の実質化への配慮、及びシラバスの作成・活用についても適切に運用されている。基礎学力不足学生、単位不足学生（特に心身の不調を伴う学生）への対応は多くの大学が直面する困難な課題であり、不断の対応と検証が必要である。

川腰委員

- ・教育課程を柔軟に見直すとともに、新たな授業形態も積極的に取り組んでもらいたい。

長谷部委員

- ・多数の学生を抱える私立大学と違い、1学年230人あまりの大学であるからこそ、学力、体力の向上についても効果的な教育が期待できる。
- ・受験後という勉強癖がついている時期の語学教育や体力面の強化は必要である。

## 6 学習の成果

項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
6-1	3	4	5	5	4.3
6-2	3	3	4	3	3.3
平均	3.0	3.5	3.0	4.0	3.8

### 6-1 学習の成果・効果

#### 表 主査

・「物理学Ⅰ」・「生物学Ⅰ」の単位取得割合がかなり低いことは、基礎学力の不足している学生が多いことを示している。この事実への対応として、「基礎物理学」・「基礎生物学」等の補習授業を実施していることは評価できるが、その授業が十分に効果をあげていることについての検証が必要である。

#### 大谷委員

・教養教育の成果・効果は、学生への授業アンケートによる検証が行われており、関連部会やFD研修会等で情報共有と意見交換が継続的に行われている。1、2年次生への成績返却と履修指導は教養教育担当教員が行っているが、入学定員増の影響により、細かな指導が困難になっている。学生のモチベーションを回復する上でも、学生が所属する専門学科の教員の支援を考えるべきではないかと思われる

#### 川腰委員

・限られた数の専任教員にもかかわらず、休学、退学、留年数は少なく、丁寧できめ細やかな指導がなされている。

#### 長谷部委員

・学生9人あたりに教員1名という、肌理の細かい指導をしている様子が見え、休学者や留年者、退学者を出さないようにする姿勢は素晴らしい。

### 6-2 卒業（修了）後の進路状況等と学習の成果

#### 川腰委員

・「就職に強い大学」としての評価が定着していることは評価できる。しかし、工学系大学の中では進学率が低いことや、他大学大学院への進学数が限られていることには、物足りなさを感じる。

#### 長谷部委員

・卒業生との関わりは、在校生のリクルーティング活動や寄付の増加などにおいて大切である。今以上の積極的な広報が必要である。

## 「6 学習の成果」についてのコメント

表 主査

- ・教養教育担当の教員が、クラス担任的な役割を果たすことで学生に対する細やかな対応が出来る点は評価できる。その一方で、個々の‘クラス’の枠を超えて、問題を抱えた全ての学生の情報を把握している組織（または責任者）があることが望ましい。

大谷委員

- ・学習の成果指標の一つである単位取得・成績状況に関しては、1、2年次生に対し、教養ゼミを通じて人間関係を構築した教養教育の教員が成績返却と懇切な履修指導を行っている点が評価できる。一方で、特に成績不振者に対する学習意欲の再喚起という点からは、学生が高年次で所属する専門学科の教員からの支援を受けることも有効ではないかと考える。

川腰委員

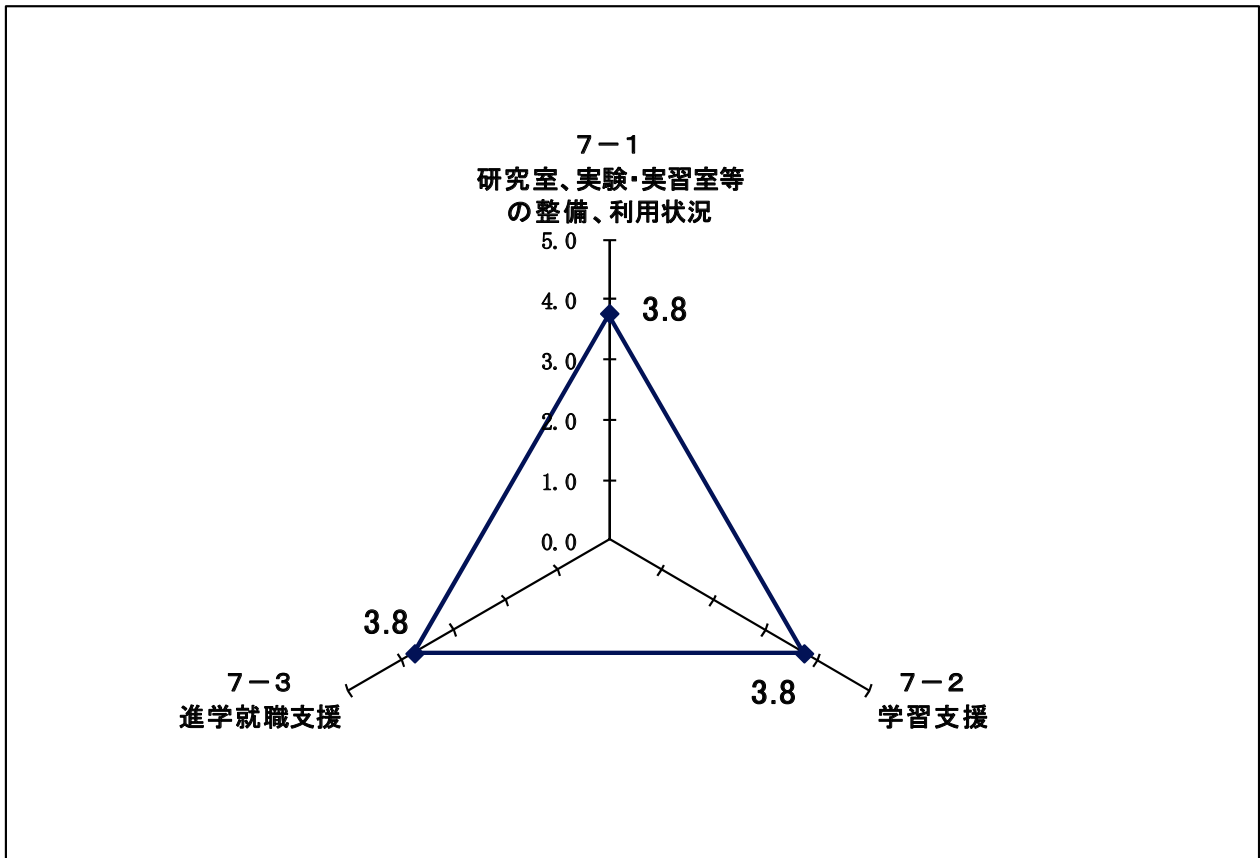
- ・今後は、就職だけでなく、進学率の増加にも力をいれていただきたい。

長谷部委員

- ・高校生の全入時代に入っても、建学50年の歴史や地元校であるという特徴を生かしている。



7 施設・設備及び学習支援



項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
7-1	5	3	4	3	3.8
7-2	3	4	4	4	3.8
7-3	3	3	4	5	3.8
平均	3.7	3.3	4.0	4.0	3.8

7-1 研究室、実験・実習室等の整備、利用状況

表 主査

- ・講義室等において、PC コンセント・有線 LAN・各種マルチメディア機器への対応がなされている点は評価できる。また学生実験室の整備がなされている点は優れている。

大谷委員

- ・施設の狭隘化・老朽化対策は直ちに対応が困難な場合が多いが、継続的に改善のための予算措置等を求めて行く必要がある。

川腰委員

- ・適切と思われる。しかしながら、常に必要に応じて整備していく必要がある。

長谷部委員

- ・学内インフラの老朽化は、どの学校にもおける共通も問題である。

## 7-2 学習支援

表 主査

- ・1年次生・2年次生とも、語学など必修科目への学生の学期半ばにおける出席状況が、教養ゼミ担当者に伝わるようなシステムがあると、欠席の多い学生の情報を早い段階でつかみ易い。

大谷委員

- ・1年次生に対するガイダンス、学習相談・助言等については、教養ゼミ担当教員がきめ細かく対応している点が評価できる。

川腰委員

- ・学生と担当教員が学年の切れ目なしに相談できる仕組みが必要である。
- ・パソコンの活用は順調のようであるが、ハードの進化に伴う講義支援システムの改善を考える必要がある。

長谷部委員

- ・県内学生が30%とはいえ、独居学生におけるフォローはぜひ、継続いただきたい。

## 7-3 進学就職支援

川腰委員

- ・就職に対して、進学面での支援に物足りなさを感じる。

長谷部委員

- ・あまり国公立大学では就職率は論議されないが、教員・学内職員の努力によって就職率は左右される。その中で100%を維持するのは優れている。

## 「7 施設・設備及び学習支援」についてのコメント

表 主査

- ・学生の講義への出席状況・単位の取得状況などの教務関係情報と、心身の病気などの健康面に関する情報等を、一体的に把握することのできる体勢があることは、当該学生への迅速な対応をする上で重要である。

大谷委員

- ・施設整備の問題は全学的な対応が必要であり、現状説明と要望を継続的に行う等の対応が必要である。学修支援に関しては、小規模大学の特色を生かした丁寧な運用が行われているが、2年次生等へのさらなる組織的対応に期待する。

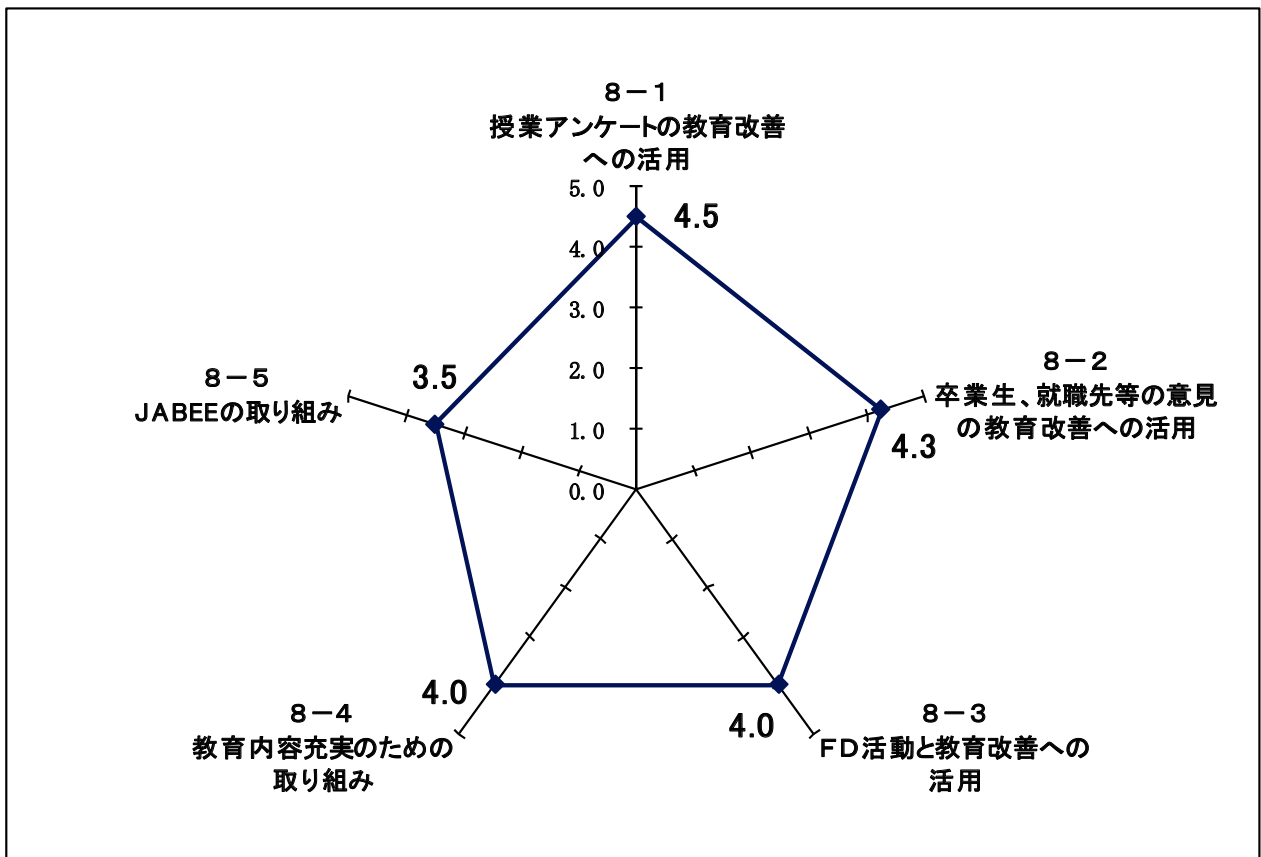
川腰委員

- ・工学系大学として必要な施設・設備は、常に整備が必要である。進学面での支援の充実が望まれる。

長谷部委員

- ・就職支援については教員のみならず、職員の高い意識が必要であり、それが実行されている。

8 教育の内部質保証システム



項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
8-1	4	5	4	5	4.5
8-2	4	4	4	5	4.3
8-3	3	5	4	4	4.0
8-4	5	4	4	3	4.0
8-5	3	4	4	3	3.5
平均	3.8	4.4	4.0	4.0	4.1

8-1 授業アンケートの教育改善への活用

表 主査

- ・学生アンケート評価について、グループ全体で改善策を考えるシステムは、アンケート結果を有効に活用できる点で評価できる。

大谷委員

- ・授業アンケートに基づく教育改善の試みは、活発に行われている。特に、アンケートのグループ検討会におけるピアレビューシステムは特色があり、有効なものと評価できる。

川腰委員

- ・授業アンケート結果を過度に重視する必要はないが、指導教員の顔ぶれがあまり変わらない中、常に改善の意識を持つことは大切である。

長谷部委員

- ・大学教員は一般的に、独善的になりがちであるが定期的なアンケート調査によって改善策を講じている。

## 8-2 卒業生、就職先等の意見の教育改善への活用

表 主査

- ・卒業生や就職先企業からの外部講師の話を聞く機会が設けられていることは、学生の視野を開き自分の将来設計を考える上で有効であると評価できる。

大谷委員

- ・1年次から、卒業生を対象としたキャリア教育を行うことは、学生の意欲やキャリアパスの具体的イメージを醸成する上で有効な取り組みである

川腰委員

- ・次年度からの卒業生からの意見聴取に期待する。

長谷部委員

- ・就職率100%維持のためにも、卒業生の活用は大切な方策である。

## 8-3 FD活動と教育改善への活用

表 主査

- ・基礎科目に関するリメディアル教育の有効性に関する検証が必要であり、外国語の英語に能力別クラスの導入に関する検討も考えられる。

大谷委員

- ・【現状】及び資料8-3-1に示されているように、FD活動とその教育改善への活用は、継続的かつ精力的に行われている。

川腰委員

- ・非常勤講師も含めて継続的に実施されているのは評価できる。

長谷部委員

- ・定期的なシラバスの見直しにより、「日本語表現法」などの新カリキュラムを設置は評価できる。

#### 8-4 教育内容充実のための取り組み

表 主査

- ・トピックゼミの開設・社会人の活用・エスプリの導入・資格取得ゼミの開設・環境教育プログラムなど、教育内容の充実を目指した様々な工夫がなされていることは評価できる。

大谷委員

- ・トピックゼミは、共通で明確な基本方針の下に実施されており、教養教育・専門教育の教員が協働して行われている特色ある授業であると評価できる。これらの実績が評価されてCOC事業採択につながった点でも意義が深い。ゼミ実施上のさらなる改善が期待される。環境教育プログラムの実施は、大学の特色として、継続・発展が望まれる。

川腰委員

- ・教育内容充実のための努力は評価できる。

長谷部委員

- ・大学が資格を取る為の予備校・専門学校になる事はないと思うが、大都市校ではないのでこれらの教育環境を整えることは必要である。

#### 8-5 JABEEの取り組み

大谷委員

- ・JABEEの取り組みは、特に立ち上げの時期において多大の時間と労力を要するものであるが、教養教育が工科系大学の一組織として協力することには意義がある。

川腰委員

- ・厳格な評価が、全学の方針となっていることは適切である。

#### 「8 教育の内部質保証システム」についてのコメント

表 主査

- ・教育内容の充実を目指して様々な取組がなされていることは評価できる。その上で、以下の点に関する基本的な観点を大事にしたい。大学教育は大別して2つの要素からなると考えられる。一つの要素は知識の伝授（使い方を含めて）であり、もう一つの要素は学問の持つ魅力（考え方等を含めて）を伝えることである。第二の要素が大学における教育の大きな特徴であるが、その根源は各教員の研究者としての知見の深さと研究に取り組む姿勢にある。その意味で、教育内容の向上に向けた取り組みと同時に、個々の教員の研究に取り組む人間力の向上が図られるシステムの構築も重要な課題である。これは研究活動の項とも密接に関係している。

大谷委員

- ・教育の内部質保証システム運用については熱心に行われており、JABEE等大学全体での取り組みに対する協力状況も良好である。

川腰委員

- ・教育の質を保証するための取り組みは、総じて評価できる。

長谷部委員

- ・シラバスをチェックすると、その都度の見直しと教員の意識の高さを感じることができる。

**9 教育情報等の公表**

項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
9-1	4	4	5	5	4.5

**9-1 教育情報等の公表**

表 主査

- ・教育目標・教育研究活動等の情報が、各種媒体を通して積極的に公開できている点は優れている。

大谷委員

- ・教養教育の目的は、学生・教員に周知されており、高校や受験生、社会へも広く公表されている。教育課程の編成や学生支援等に関する情報も、大学ホームページや冊子等で適切に公開されている。

川腰委員

- ・県内高校には、大学職員による各校訪問により、随時適切な情報提供がなされている。今後も継続が望まれる。

長谷部委員

- ・高校生向けのハンドブックなども私立並みに充実している。今後も継続いただきたい。

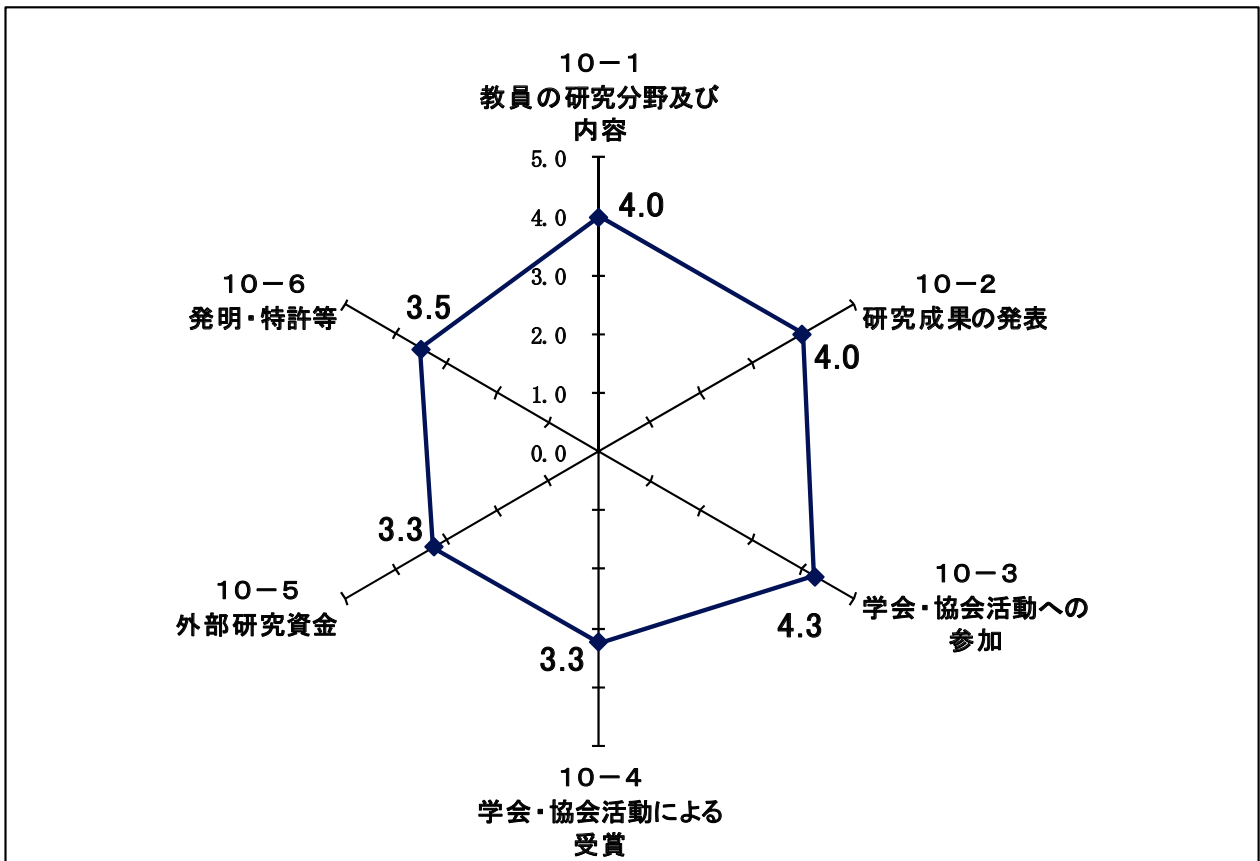
**「9 教育情報等の公表」についてのコメント**

長谷部委員

- ・高校生向けのハンドブックなども私立並みに充実している。今後も継続いただきたい。



10 研究活動



項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
10-1	3	5	5	3	4.0
10-2	4	3	4	5	4.0
10-3	4	4	4	5	4.3
10-4	3	3	4	3	3.3
10-5	4	3	3	3	3.3
10-6	3	3	5	3	3.5
平均	3.5	3.5	4.2	3.7	3.7

10-1 教員の研究分野及び内容

表 主査

- ・教員の定員が限られているなかで、教養教育の場合、様々な研究分野のどの分野に人数を配分すべきかを定めることは大変難しい問題であるが、将来的な課題として歴史学の分野の専任教員の採用を考えることは重要かもしれない。

大谷委員

- ・教養教育担当の教員の研究分野は人文・社会・自然科学の全分野にわたっており、専門学科

の基礎教育、及び人文社会系分野の教養教育担当組織として適切であると評価できる。

川腰委員

- ・多彩な専門分野を有する教員により、幅広い視野を持たせる指導が考慮されている。

長谷部委員

- ・大学は、中高と違い教員の学術発表の場である。その成果の一つに卒業生がアカデミックな場で活躍することがあげられると思うが、教員の中に卒業生が少ないのではないか。

## 10-2 研究成果の発表

表 主査

- ・分野により発表論文数の平均は異なるが、それぞれの分野で発表された論文の数は、それらの分野で研究成果が着実に得られていることを示すものと評価できる。

大谷委員

- ・人文・社会科学系、自然科学系ともに、分野特性・学内業務（入試等）・分野別教員数等を勘案すれば、一定水準の研究成果を挙げていると評価できる。

川腰委員

- ・研究成果の発表は着実に行われている。

長谷部委員

- ・積極的な発表をおこなっていて大学の知名度の向上にも成果が上がっていると思われる。

## 10-3 学会・協会活動への参加

表 主査

- ・学会誌の査読委員・学会賞の審査員が複数名いることは評価に値する。

大谷委員

- ・学会・協会活動の水準はほぼ適切であると評価できる。

川腰委員

- ・学会・協会活動は、活発に行われている。

長谷部委員

- ・積極的な発表をおこなっていて大学の知名度の向上にも成果が上がっていると思われる。

## 10-4 学会・協会活動による受賞

川腰委員

- ・特記すべき受賞件数の中に教養教育担当教員も含まれており、評価できる。

**10-5 外部研究資金**

表 主査

- ・毎年、科研費その他の外部資金が継続的に確保されている点は評価できる。

大谷委員

- ・教養教育担当教員数及び研究分野から見て、科学研究費の採択件数・採択金額がやや少ない印象がある。

川腰委員

- ・科研費等の採択率を上げる取り組みが必要である。

長谷部委員

- ・建学50周年を迎える大学であり、卒業生OBも多く県内にいらっしゃると思われるが、卒業生との関わりをもっと深く持つことでOBからの寄付金も増えるのではないかとと思われる。

**10-6 発明・特許等**

川腰委員

- ・科研費等の採択率を上げる取り組みが必要である。

**「10 研究活動」についてのコメント**

表 主査

- ・研究の成果を評価するには、単に発表された論文の数だけでなく、研究内容の質も問われるべきである。研究の質の評価は短期的な視点だけでなく、長期的な観点からの問い掛けも重要となる場合がある。その意味で、研究の成果を評価することは非常に困難な課題である。特に、教養教育の場合、各教員の研究分野が多岐にわたること、また発表された論文そのものに目を通すことが難しいことなど、外部評価でその研究成果に関して意見を述べることは、本来不可能であると言わざるをえない。上記の点を踏まえた上で、今回は数値化されたデータのみからの意見を述べることにした。内部の研究者同士は、データ化されたものだけではわからない点に関しても、研究内容とその質に関して互いに評価できる点が多いと思われるので、メンバー間の相互評価が機能するような雰囲気作りが大切であろう。分野の異なる研究者の研究内容を知る機会として、教養教育内の談話会のようなものを持つことも一案と考えられる。これは他の分野の研究者の研究分野を知る機会となるだけでなく、分野の異なる研究者に自分の研究内容を分り易く話すことで、研究の意義を自問する機会としても有効である。

大谷委員

- ・各専門分野に基本的には1名の教員のみが配置されている状況で、教養ゼミ・講義をはじめとした様々な教育活動、学内業務を行っていることを考えれば、研究活動の全般的状況は、水準を満たしていると評価できる。ただし、科学研究費については、その獲得に向けた取り組みが望まれる。

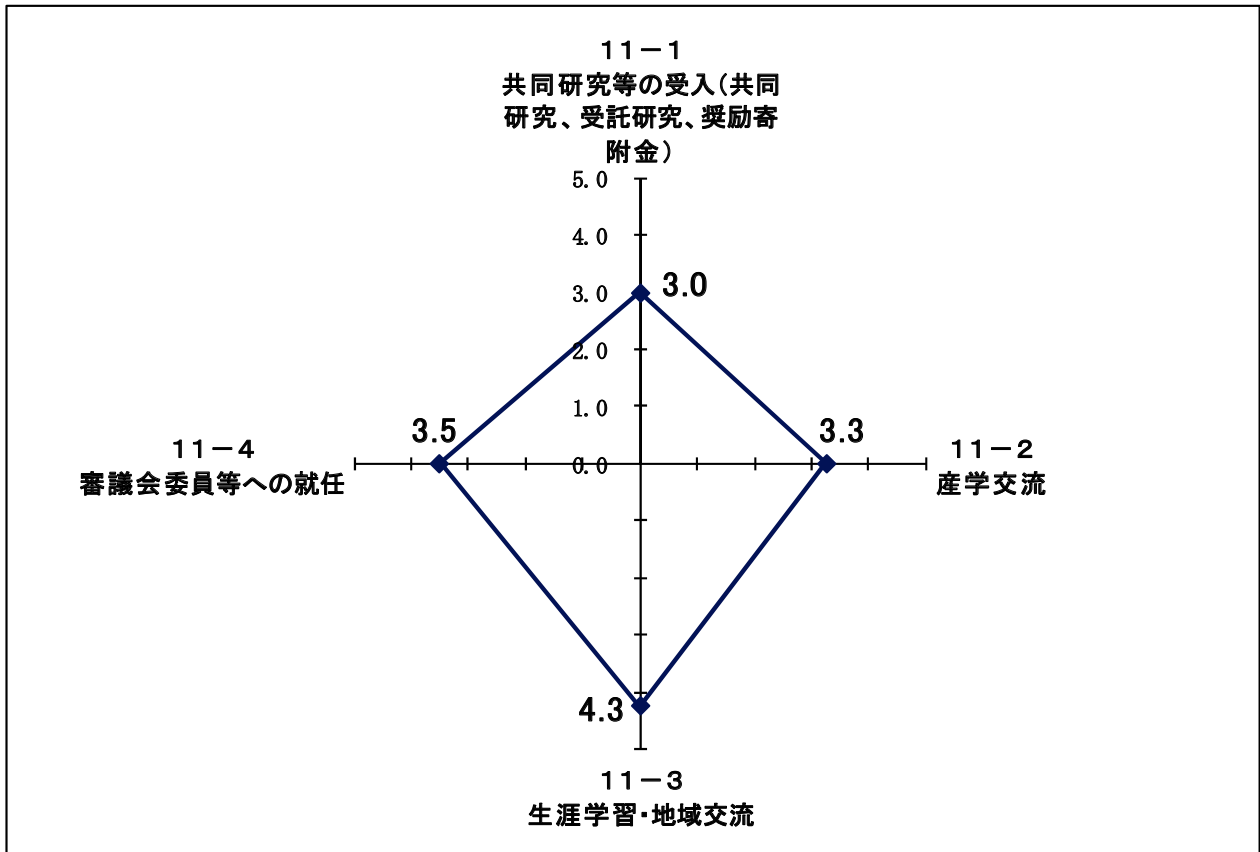
川腰委員

- ・大学の魅力を高めるためにも、教員による研究活動の一層の充実が望まれる。

長谷部委員

- ・教員の質を担保するには、旧帝大を含む有名大学卒業者を集めることではない。また著名な研究者を集めることで大学の質が上がるわけでもない。
- ・母校を愛し、母校・地元の為に働ける人材の育成が必要である。

1 1 地域連携の推進



項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
11-1	3	3	3	3	3.0
11-2	3	3	3	4	3.3
11-3	5	4	4	4	4.3
11-4	3	3	5	3	3.5
平均	3.5	3.3	3.8	3.5	3.5

1 1-1 共同研究等の受入

表 主査

- ・2010年以降、奨励研究だけでなく共同研究の受け入れも進んでいることは評価できる。

大谷委員

- ・教養教育担当教員の研究分野から見て、外部機関との共同研究件数が多くないことは理解できる。

川腰委員

- ・基礎研究が中心であり、難しい点も多々あるが、県内他研究機関などとの連携を促進していくことが望まれる。

### 1 1 - 2 産学交流

大谷委員

- ・技術指導に関しては、一定程度の実績があると評価できる。

川腰委員

- ・しっかりとした記録を残して欲しい。

長谷部委員

- ・開校 50 年で地元との関わりが強い。その中で、常に積極的な産学交流の姿勢が伺える。

### 1 1 - 3 生涯学習・地域交流

表 主査

- ・県立大学としての原点に基づいて、様々な地域交流が図られていることは評価できる。

大谷委員

- ・公開講座、県民開放授業、高大連携事業等において、実績を上げている。特に、公開講座の受講生はかなりの数に上っており、地域社会への貢献度は高いと評価できる。

川腰委員

- ・生涯学習に関しては、公開講座でテーマや講師が固定化し受講者も減少傾向にあるが、高大連携事業については、積極的に取り組んでいただいております、感謝しています。高校生の大学理解に資するところが大きいので、今後とも実施時期や内容について、高校側と十分な意見調整を行い、積極的に取り組んでいただきたい。

長谷部委員

- ・高校のみならず、小中高生との関わり、エルダー世代との関わりは地域社会への貢献が大きい。

### 1 1 - 4 審議会委員等への就任

表 主査

- ・地域貢献の視点からは、審議会委員等として積極的に協力することは重要であるが、審議会等が形式的な議論の場にならないよう委員としての職責を十分に果たすためには、その任務にかなりの時間が費やされることを考慮して、委員就任を引き受けるべきか否かの判断が求められる。

川腰委員

- ・就任件数も多く、地域社会への貢献として高く評価できる。

## 「1.1 地域連携の推進」についてのコメント

表 主査

- ・「富山県の発展をめざした県民の大学」という大学の理念実現に向けて、地域との連携・交流を図る様々な試みがなされていることは高く評価できる。今後も、富山県の教育・文化の向上に向けて、大学の知見が活かされる活動の継続を期待したい。一方では、各種審議会委員等への教員の就任が、富山県の発展に向けて十分に貢献しているかについての検証は必要となるであろう。

大谷委員

- ・全学展開が要件であるCOC事業の採択を受け、本項目の内容についてもさらに充実することが期待される。

川腰委員

- ・今後とも、地域連携、特に県内高校との連携事業への理解と協力をお願いしたい。

長谷部委員

- ・通常の高校卒業生だけでなく、エルダー世代の入学や、学内解放などを積極的に行うべきではないか。

## 1 2 国際交流

項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
12-1	4	4	4	2	3.5
12-2	2	3	3	2	2.5
平均	3.0	3.5	3.5	2.0	3.0

## 1 2 - 1 教員の国際交流

表 主査

- ・教員の国際交流が積極的に行われていることは評価できる。

大谷委員

- ・国際会議等の短期海外出張については活発に行われている。代替教員措置等の組織的支援に基づいた長期研修の拡充が望まれる。

川腰委員

- ・国際交流を活発にする上で、教員の中長期の海外研修をサポートする制度が必要と思われる。

長谷部委員

- ・地元の大学ということでドメステックなのかもしれないが、国際交流は必然であり、海外への情報発信及び海外校との提携をもっと積極的に行うべきである。これらが今以上の教員・学生の意識改革につながると思う。国際交流は、海外に行くことだけでなく近隣大学の国際交流センターとの連携などでも図れるのではないかな。

## 1 2 - 2 留学生の受入

表 主査

- ・留学生が今後定常的に入学するような工夫が求められる。

大谷委員

- ・留学生の入学実績はかなり少ないが、該当者に関しては教養教育として丁寧な対応がなされている。

川腰委員

- ・担当部門の設置や教職員の配置など、もっと積極的に受け入れを進めるための方策が必要である。

長谷部委員

- ・過去の留学生総数がわからないが、中国人だけでなく ASEAN・新興国諸国へのアプローチも必要である。留学生と日本人学生を交流させることにより貴校で行われている英語や日本語教育はもっと生きてくると思う。



## 「12 国際交流」についてのコメント

表 主査

- ・教員の海外留学をさらに進めるためには、非常勤講師の手当ての問題と同時に、サバティカル制度の導入等を検討したい。

大谷委員

- ・建学の理念・目的に鑑みつつ、国際化への対応について、全学的・組織的なビジョンの下、長期的な戦略を検討することが望まれる。

川腰委員

- ・グローバル化が進む中で、国際交流促進に向けた取り組みの充実が望まれる。

長谷部委員

- ・残念ながら、国際志向については、ポリシーが伝わらなかった。

## 13 自己点検評価

項目	表 主査	大谷委員	川腰委員	長谷部委員	平均
13-1	3	4	4	5	4.0

## 13-1 自己点検評価の取り組み

表 主査

- ・教養教育の構成員全体が、自己点検評価の作業に携わっていることは、改善すべき点に関する情報の共有がなされることになり評価できる。

大谷委員

- ・自己点検評価への取り組みについて、教養教育として適切に対応している。

川腰委員

- ・これまでの自己点検評価がその後の改革にどのように活かされたのか、検証が必要である。

長谷部委員

- ・企業人に外部評価を行わせるなど、地元だけでなく開かれた大学として非常に評価できる。

## 「13 自己点検評価」に対するコメント

表 主査

- ・自己点検評価・外部評価・認証評価など、義務づけられていることから止むを得ない面もあるが、点検疲れが起きないように工夫をしながら、長期的な視野に立った真の大学改革に繋がる改善に取り組まれることを期待したい。

長谷部委員

- ・企業人に外部評価を行わせるなど、地元だけでなく開かれた大学として非常に評価できる。



### Ⅲ 訪 問 調 査

## 訪 問 調 査

## 1. 日 時

平成26年（2014年）10月24日（金）13:10～15:05

## 2. 場 所

教養教育学科等会議室（委員講評打ち合わせ：学科連絡室）

## 3. 出席者

## &lt;外部評価委員&gt;

主査	表 實	慶應義塾大学名誉教授・慶應義塾大学自然科学研究教育センター共同 研究員（元 東北公益文科大学副学長）
委員	大谷 芳夫	京都工芸繊維大学副学長・附属図書館長（元 富山県立大学助教授）
委員	川腰 善一	富山県立富山中部高等学校校長
委員	長谷部裕樹	株式会社オリジネーター代表取締役社長

## &lt;教養教育教員&gt;

教授	石森 勇次（主任）、佐藤 幸生、中川 佳英、原口 志津子、 福原 忠
准教授	上谷 保裕、岡本 啓、川上 陽介、川崎 正志、川端 繁樹、 須田 孝司、中畷 崇、戸田 晃一、バデューチ・ドミニク、 平野 嘉孝、室 裕司、山崎 大介
講師	井戸 啓介、土井 一幸、濱 貴子

## 4. 訪問調査概要

## （1）主任教授挨拶、参加者紹介、委員紹介、視察スケジュール紹介

## 【石森主任教授】

## ○主任教授挨拶

ただ今より、富山県立大学・工学部・教養教育に関する外部評価をお願いいたします。

私は教養教育主任教授の石森です。

外部評価委員の方々には、お忙しい中、7月から9月にかけての書面調査、そして本日の訪問調査のために時間をさいてくださり、真に有り難うございます。

本学は、今年で開学25年目にあたります。この約四半世紀の間、1990年代には基準大綱化を受けて多くの国公立大学での教養部廃止がなされた中、本学の教養教育は一学科相当の組織として堅持され、一貫して本学の教育の柱としての教養教育を担ってきました。

今回の外部評価は、前回の外部評価から7年ぶりとなります。ゆとり世代の入学や大学全入時代といわれる今日において、教養教育の重要性は、よりいっそう増しているのではないかと思います。

本日は、委員の方々の忌憚のないご意見をお聞かせいただいで、教養教育について様々な面からご教示をいただければ、大変幸いに思います。

なお、質疑応答や講評等の内容を、外部評価報告書に掲載するため、録音や写真撮影をさせてい

ただきますので、ご了承願います。

#### ○参加者紹介（教員・委員紹介）

それでは参加者の方々を紹介いたします。お手元の資料の配席図もご覧下さい。まず教養教育の教員を紹介いたします。私の隣の教員から順に紹介します。

次に外部評価委員の方々を紹介いたします。私の隣の委員の方から順に紹介します（各自紹介は略）。

#### ○スケジュール説明

次に、スケジュールをご説明いたします。配布資料の訪問調査次第をご覧下さい。

この後、学内視察として、教員室、カウンセリングルーム（学生相談室）、アクティブラーニング室（講義室 A306）、物理学実験室をご案内します。

視察終了後は、この会議室に戻っていただき、学内視察やこれまでの書面調査などを通じて、お気づきになった点などについて、ご質問やご意見・ご助言をいただきます。

質疑応答の後、委員の方々には別室にて講評の打ち合わせを行っていただきます。

打ち合わせ後、再びこの会議室にて、各委員の方々お一人お一人からの講評をいただき、最後に主査の方から総括講評をいただきたく思います。

次第に記載した時間は、おおよその目安となる時間で、質疑応答、打ち合わせ、講評の時間配分は表主査にお任せしたいと思います。時間的余裕のあまりないスケジュールとなっておりますが、工学部全体の訪問調査も後にありますので、15時05分までには終了するように、よろしくお願いいたします。

### （２）学内視察（13:20～13:50）

#### ①本部棟教員室（4階 石森主任教授教員室）

##### 【石森主任教授】

教養教育の教員は20人おりますが、それぞれ教員室がありまして、日々、教育、研究等さまざまな業務を行っています。各教員室にはこのように、机、テーブル、椅子などの備品があります。

このテーブルを一番よく使うのは学生との面談のときです。本学では学生の成績はゼミの教員が直接渡すことになっております。その折りに、履修状況、単位の修得状況をみながら、様子をきいたり相談を受けたりしています。内部資料で中身をお見せできませんが、教務委員会の作った詳しい成績状況のリストがございまして、必修科目や総単位数の状況を参考にしながら、どうして修得できなかったのか、などについて詳しく話し合います。なお、半期に一回は必ず成績返却で面談をします。

私は数学の担当なので、学生が数学の質問に来ましたら、このホワイトボードを使って教えたりもします。最近、残念ながら質問に来る学生は減っておりまして、たぶん、最近採用した若い先生の方に行っているのかなと思います。

それ以外にも、3年次に他大学に編入したいですとか、違う学部、例えば理学部に進学したいという相談や、大学院入試の数学の問題を教えてほしいなどという相談もたまに受けます。

##### 【表 主査】

ここで教養ゼミをするのですか。

##### 【石森主任教授】

開学当初は、専門の先生方も教養ゼミを担当して下さっていたので、教員1人あたりの学生数も6名ほどと少なかったのが教員室でできたのですが、専門課程が整備されて大学院もできましたから、専門の先生方の応援がなくなりまして、1ゼミあたりの学生数が増えました。今は12、3名で

す。教員室でゼミをしている教員もおりますが、教室や会議室を使うようになっています。私も先ほどの会議室を使っております。

【長谷部委員】

例えば英語などの必修単位については4年まで持ち越すことについての相談などはありますか。

【石森主任教授】

必修科目は基本的に4年生まで持ち越せません。総数としては4年まで持ち越すことはありますが、ですから、必修科目の修得状況については非常に気になることでありまして、面談の時のポイントでもあります。時間割についてもまず必修を中心に埋めてゆくように注意を促したり、総数に注意させたりという指導をします。

【川腰委員】

1人の先生が、直接成績を渡される、つまり担当する学生数は現在何人ですか。

【石森主任教授】

現在、1年生と2年生の成績渡しを教養の教員が担当しておりまして、あわせて25人ぐらいです。

【長谷部委員】

教養教育の履修は学科ごとですか。それともそれを超えてオープンにしていますか？

【石森主任教授】

教養科目は総合科目、基礎科目、外国語科目とございますが、総合科目と第二外国語科目は学科を超えて、英語と基礎科目は基本的に学科ごとのクラスとなっています。なお基礎科目は、高校の物理や数学から専門の科目に橋渡しをしなければならないので学科ごとに違うカリキュラムとなっています。機械システム工学科では、物理や数学に重点をおきますし、生物工学科では生物学や化学などに重点をおきます。そのあたりは学科によって違います。

【表 主査】

進級にあたっての要件みたいなものはどうなっていますか。

【石森主任教授】

まず2年生終了時点で総単位数が70単位ないと3年生のときに履修できない必修科目がありまして、事実上留年が確定するという壁があります。次に4年生の卒業研究に配属されるにあたっては、必修科目を全部修得してさらに総単位数が110単位なくてはならないという制限があります。卒業にあたっては130単位です。

【表 主査】

3年に進級する際の留年率はどうでしょうか。年によって違うのでしょうか。

【石森主任教授】

私のゼミでの感覚ですと、10数人の中で毎年いるわけではないという感じです。実数についてはこの資料や工学部の自己点検報告書を見ていただくとわかると思います。

【大谷委員】

成績状況を保証人に知らせるということについて、現在検討中ということですが、まだ実際にはやっていないということですか。

【石森主任教授】

実は1学期にとる単位数の目安がありまして、それを下回る学生については、入学時に本人の承諾を得た上で、保護者の方に連絡しています。ですから、教員が保護者の方から直接電話を受けたり、保護者の方とここで面談したりすることもあります。

【大谷委員】

特段問題の無い学生については成績状況を知らせるということはしているのですか。

【原口教授】

それは現在しておりません。

【石森主任教授】

留年しそうな、あるいは卒研配属が危ぶまれるような学生とその保護者にはイエローカードとい  
いますか、黄色い紙の警告文を送ります。留年確定しましたという場合には、赤い紙に注意書きし  
て送ります。

## ②学生相談室

【岡本准教授】

ここは土足禁止ですので、靴を脱いでお入りください。今は、学生相談は入っておりません。相  
談員の方はおられます。

【表 主査】

長く勤めておられますか。

【前田相談員】

いえ、私はこの4月からです。

【表 主査】

いつ来られておられますか。

【前田相談員】

私は月曜日、木曜日、金曜日です。もうお一人の先生が火曜日、水曜日です。それぞれ半日ずつ  
です。

【長谷部委員】

どのくらい利用されていますか。

【前田相談員】

4月からだと30名ぐらいです。

【大谷委員】

これは全学対象ですか。学部の4年生とか大学院生もこちらに来るのですか。

【前田相談員】

はい。

【大谷委員】

それをお一人というか、もうお一方とで全部ですか。

【前田相談員】

はい。

【長谷部委員】

学生だけですか。

【前田相談員】

いえ、教員の方が学生さんのことで相談に見えることもありますし、保護者の方が来られること  
もあります。

【長谷部委員】

可能な範囲で良いのですが、どのような内容ですか。



**【前田相談員】**

例えば学校に来るのがたいへんになったとか、対人関係で悩むとかですね。  
(室外で)

**【表 主査】**

相談員の方は臨床心理士の資格をもっておられるのですか。

**【原口教授】**

はい。ですからひっぱりだこで、来ていただく日を確保するのは大変です。

**③A306 教室 (アクティブ・ラーニング室)****【原口教授】**

アクティブラーニング室はこちら (A307) にもあるのですが、本日はこちらの部屋 (A306) で説明させていただきます。

**【石森主任教授】**

この部屋は今年度整備されたばかりです。主にゼミなどで使いますが、実際に使っている濱講師にゼミの様子など説明してもらいます。

**【濱 講師】**

私はトピックゼミという少人数制の2年生向けゼミで教室を使わせて頂いています。テーマは「近現代日本における科学技術の先駆者の自伝を読む」で、日本の近現代の科学技術者の自伝を読みながら、富山県の企業の経営者の方にインタビューするという授業です。その質問項目を考えることを、班に分かれて事前学習という形で行います。3コマほど時間をとりまして、その経営者の方に関する新聞記事や雑誌記事を読みます。それをもとにして、事業を展開される上でのエピソードや経営者の方がどのような苦境を乗り越えてこられたのかのような質問を考えさせます。

**【長谷部委員】**

ゼミは選択制ですか。

**【濱 講師】**

はいそうです (必修単位だが、トピックを選ぶことはできる)。

**【表 主査】**

非常に面白いゼミだと思うのですが、評価方法はどうされていますか。

**【濱 講師】**

事前に自己評価を行います。このゼミで身につけてほしい力というものを三つ設定することになっていて、一つは地域課題力、地域の問題をどのくらい理解できるかということで、私の中でも企業をどのくらい理解できるか、ということや企業に関する質問ができるかということの評価項目にしております。あるいはこの授業の中で、お互いどのくらいディスカッションできるのかということ、仲間内でのコミュニケーション力をつけようということで、事前ワークシートやディスカッションの中での発言がしっかりできたのかということやビデオカメラで撮ったり、事前ワークシートをチェックしたりしながら評価しています。もう一つは、実際に経営者の方に質問する時に、質問項目だけではなくて、その場の雰囲気を受けて質問できるか、というようなことを評価してみようと考えております。

**【大谷委員】**

ずっとここでディスカッションしたり、インタビューしたりする、その間先生は全部立ち会って付き添っているわけですか。

【濱 講師】

はい。

【大谷委員】

何人ぐらいの学生さんですか。

【濱 講師】

11 人です。

【大谷委員】

他にもこういうことをされている先生はいるのですか。

【濱 講師】

私とは内容が違いますが、地域の方と連携して製品開発されたり、ファミリーパーク（動物園）に出向いて魅力向上の提案などをされたりしています。

【大谷委員】

そういうゼミは全部でどのくらいありますか。

【濱 講師】

トピックゼミの担当者は全部で 22 人です。

【石森主任教授】

ただ、まだ発展段階で、全教員ではなく、一部の教員が先行している状況です。

【大谷委員】

4 年生とおっしゃいましたか。

【濱 講師】

2 年生です。

【川腰委員】

評価する場合、たくさんの先生方で分かれてやっているわけですから、なにか基準は設けておられるのですか。

【濱 講師】

評価する場合は、さきほど申し上げた三つの柱、地域課題力と仲間とのコミュニケーション力と対外的なコミュニケーション力、この三つはしっかりと見てゆこうということで、その三つの中で何を具体的に評価するかということは各担当教員に任されています。

【川腰委員】

そうしますと、ルーブリックのような段階的なものですか。

【濱 講師】

そうです。ルーブリックです。

【表 主査】

こういう部屋はいくつありますか。

【平野准教授】

ここには二つですが、離れたところにもう一つ大きな部屋があります。今年三つ作りまして、今はそれだけです。今後増やしてゆくということです。

【長谷部委員】

先生方には少し耳の痛い話かもしれませんが、学生に選択させると、人気のある先生とそうではない先生ができますよね。その配分はされているのですか。

【平野准教授】

振り分けはキャリアセンターで希望調査をとってしています。ただし、学生には希望調査通りにはならないということはあらかじめ言うておきます。それで教員 22 人にだいたい均等に割り振ります。

【原口教授】

物理の相談教室についてのご説明を福原教授にお願いいたします。

【福原教授】

ゼミ形式との授業とは全く別のものですが、私も使っておりますのでご説明申し上げます。私は物理の担当者で、前期・後期で力学と電磁気学をそれぞれ教えています。最近、物理が不得意な学生さんが多く、試験で合格点がとれないことがあります。その場合、本学では、再試験制度によって不合格でも次の学期に試験だけ受けて単位を修得するという制度があります。もう 8 年ぐらいになりますが、その際に、補習をすることにしています。課題を与えて事前に予習させて面談します。ちゃんと勉強したか、3ヶ月に3回面談します。今までは普通の教室でしていましたが、今期からここを使っています。

【表 主査】

それは先生がお一人でなさっているのですか。

【福原教授】

いえ、それは学生アルバイトを使っています。4年生か院生ですが、今年は試みに3年生も入れてみました。そのことによって、実は上級生にも非常に勉強になっています。まず物理の復習ができる。上級生に感想をきくと、人に教えることがすごく難しいことがわかった、と言っていますので、上級生の勉強にもなっている。今年は学生が8名です。

【表 主査】

それは物理だけですか。数学はしていないのですか。

【石森主任教授】

今は物理だけです。専門の科目では、知能デザイン工学科などで一部の先生がされておられるようです。

【福原教授】

いろいろな先生が取り組み始めています。

【長谷部委員】

入試科目でやってきた受験の物理と、大学で先生方が教えられる物理は違うので学生がついてこられないということがあると思いますが、何をベースに先生方は大学の物理の特徴を教えようとしておられるのでしょうか。

【福原教授】

高校の物理は微積分を使わないので、大学に入って初めて微積分を使って物理現象を表現してゆくということです。そこが、まず一つです。もう一つは、高校の物理は問題を解くのが中心で、ある公式を使って、計算をして、結果を出す。彼らはそこは十分練習してきました。しかし、物理は自然界の現象を数式を使ってどうやって表現するかという学問です。この数式がどういう意味をもってどういう内容を表現しているのかというのを考える訓練は、学生はあまりできていません。内容としては放物運動とか、電界とか、(高校と)同じ内容をするのですが、微積分を使うということと、物理現象をどうやって微分方程式で表現するのかということの説明が主になります。

【長谷部委員】

それを説明したいけれど、残念ながららついてこられていなかったということですね。

**【福原教授】**

その辺をお互いに会話して、インタラクションしながらやると、非常に良くわかるようになります。

**④物理実験室****【室 准教授】**

生物工学科を除く1年生の物理実験を行う実験室です。今、お返しする教科書を用いて10題目について週ごとに実験をしてゆきます。各題目については、学生はレポートを作成、教員は添削して、そのレポートの採点を成績として評価してゆきます。10題目といっても、1年生の基礎物理実験ですので、高校で習ってきたような力学、電磁気学、熱学、光学の底部の2、3のテーマを扱っています。いずれも高校で習った物理Ⅱのレベルで充分間に合うような題目になっています。1年生なので、つまり高校から入ってきたばかりですので、実験というものをしてきていない学生が多いです。この物理実験が彼らにとって初めての実験で、またレポートという理系の文章を作成するという作業の入り口になります。ですから、物理の基礎的な知識も大事なのですが、それ以上に物理実験では、今後、卒業するまで、あるいはまた卒業して仕事をする上で、理系の文章を作成する、実験する上での態度、姿勢、心構え、また倫理的なもの、レポートについていえば他人のものは見ない（剽窃しない）といった基本的な理科系の姿勢を身につけるということを重視して、我々は実験を行っています。当然、安全に配慮するために、物理実験10題目に対しては基本的に教員3名と1名の大学院生をアルバイト（TA）として雇って、計4名の体制で1学科を半期みています。前期、後期各学期2学科、全4学科みております。

**【表 主査】**

実験はペアですか、1人でするのですか。

**【室 准教授】**

実験題目によって2人のペアでもしますし、3人トリオで行うもの、1人で独立して行う実験、様々です。ちょっと難しい実験になりますと、2週にまたいで同じ題目を行う実験もあります。計10題目、計11週になります。それに最初に2、3回ほどは先ほど申しましたレポートの書き方、実験に対する姿勢、我々が一番大事にしている数値の取り扱いをちゃんとしなさい、ということをして1週間か2週間かけてやります。それをきちんとできるかどうかを含めて、毎回レポート作成と実験中の指示、添削を通じて教えています。

**【表 主査】**

実験の時間は90分ですか。

**【室 准教授】**

時間割の中では、14時40分から17時10分までの2時間半です。1年生は慣れていないので、時間をオーバーする場合があります。

**【表 主査】**

レポートはその時間内に書くのですか。

**【室 准教授】**

レポートは次の週までに提出してもらいます。レポートに対して、重要な点である必ず考察してほしいこと、考えてほしいことを指示して、次週の実験の開始前までに、この入り口にあります実験レポートポストに提出させます。

**【長谷部 委員】**

実験の教科書は毎年作り替えておられるのですか。

【室 准教授】

基本的には毎年、誤字脱字の訂正の他に、説明不足と思われるところを補足したり、チェックしたりしています。したがって表紙には年度を記してあります。これは2014年度版ですが、表紙の色なども変えています。

【長谷部 委員】

最近の学生さんは真面目で、ちゃんと自分のデータをあげられますか。

【室 准教授】

それは口をすっぱくして言うておりますので。それと、学生さんは真面目なので、期待された数値を離れるといやがるのですね。それで、私たちはいやがるのではなくて、どうしてそうなったのかを考えなさいと言います。結果はもちろん大事なのですが、そのように指導しています。

【長谷部 委員】

学生時代のことを思い出すと、先輩のデータをもらったりしましたね。

【室 准教授】

それは今後の課題にもなっています。サークルに属している学生はそういうこともしているかもしれないし。剽窃については、完全に落第までさせるのかどうかについての検討も必要ですが、今後はデータを残し、採点や指導の改革に役立てていくためにも統計をとることも考えています。

【大谷委員】

1学科で同時に実験を行う学生の数はどのくらいですか。

【室 准教授】

1学科ほぼ40人から50人です。今年は入学者が多いので60人の場合まであります。

【福原教授】

一つ補足いたします。表先生がさきほど何人で実験するのか質問されましたが、10年ぐらい前までは3人をベースにして割合凝った内容の実験をさせていたのですね。ただ、それをやると3人の中にブレンができて2人がそれをコピーして提出するというということになっていましたので、その頃から考えを変えて、ある程度簡単な内容で、できるだけ1人でやらせるという方針で今はやっています。実験装置はあれは6台、これは3台ですが、2人ずつ台に張り付いて交替で1人の実験をさせます。そういうテーマが半分ぐらいです。ただ、共同でやることももちろん必要なので、そういうテーマも残してあります。ただ、1人で実験して、1人できちんと計測して、解析してレポートを書くということを重視しています。

【室 准教授】

学生が偶数の場合はいいのですが、奇数だと余ってしまいますので、先生にもよりますが、私の場合は1人でやらせるようにしています。基本、1人でできる実験ばかりです。

【川腰委員】

大学ででき実験としては適切なレベルということでしょうか。

【室 准教授】

私もこの大学以外で教鞭をとっていましたが、だいたい同じです。1年生レベルとしては同等です。

【川腰委員】

高校の方でも昔に比べれば割合実験をやらせるようになっていきますよ。

【室 准教授】

中には実験に慣れていて、早く課題を終わらせる学生もいますが、特に最初の数回の様子を見ると、ほとんどの学生は実験に不慣れで、課題を終わらせるのにかなりの時間がかかっています。  
(教養教育学科等会議室に戻る)

### (3) 質疑応答 (13:45~15:05)

#### 【表 主査】

評価項目は書面で確認させていただきました。もし、特に委員のほうで質問をしたいということがなければ、それは割愛させていただいてもいいと思います。

#### 【石森主任教授】

何かございますか。

#### 【川腰委員】

最初に研究室に入れさせていただいて、かなり暑さを感じました。先生方自身、研究室をそれぞれ使っておられて、実際、不都合な点はありますか。

#### 【石森主任教授】

実は、エアコンは集中管理されていまして、夏などは午後8時半ぐらいに切れています。夜、仕事をしたいという人は暑くて。私も、2年ぐらい前にパソコンが熱暴走して、壊れてしまい、大変困ったということもありました。自分の部屋で自由にコントロールできるといいですけども、エアコンは集中管理されており、ちょっと困っています。

#### 【中川教授】

土曜・日曜は入らないんですよ。これは、是非改善してほしいものです。  
(質疑応答時間の確認について応答あり。省略)

#### 【表 主査】

それでは改めて御質問がありましたら、この機会に。

#### 【長谷部委員】

情報の管理についてです。学生、成績の問題など、個別の情報管理はどういう形にされておられるのでしょうか。先ほど教員室でうかがったところによると、修得に問題がある場合のデータは、書類とか、アナログデータという状態であったような気もしますが、情報管理というのはどういう形でやっているのでしょうか。

#### 【石森主任教授】

情報は紙ベースのもので、本来は教務委員の方が保管するものですが、教養教育では、データが手元にあったほうが、学生を指導するのに便利だろうということでお配りしています。ただ、当然ですが取り扱いには十分気をつけております。それ以外に何か。

#### 【井戸講師】

セキュリティポリシーがあります。

#### 【石森主任教授】

そうですね。その説明をします。県庁にセキュリティポリシーというものがあって、それを準用して、大学のほうでもポリシーをつくっております。(情報管理については) それを守るということです。時々調査があります。パソコンや、特にネットワークのことで調査があるので、最低、年に1回は報告するという事はやっていますね。

それから、ウイルス対策用のソフトを必ず入れるようにと指導があって、ウイルスバスターは、全教員が入れるようにしております。

**【長谷部委員】**

先生方も、当然個人のパソコンをお持ちでいらっしゃるって、その個人のパソコンから学内のデータベースへの進入というのでできる状態になっているわけですね。

**【石森主任教授】**

データベースにもよりますけれども。

**【井戸講師】**

PCのハードウェア登録が必要です。今、学内のネットワークにつなぐためには、ハードウェアの、いわゆるMACアドレス、製造番号を登録しなければならないようになっています。従って、例えば今日、どなたかが外部から来られて、学内のネットワークにアクセスしようとしても、それはつながりません。そういうことで管理をしています。

**【長谷部委員】**

データベースの持ち出しもですか？

**【井戸講師】**

はい、県が定めているセキュリティポリシーというのがありまして、厳格にそのルールを守るということを求められていますし、それによれば、そういうセンシティブな情報というのは一切持ち出してはいけないということになります。

**【長谷部委員】**

わかりました。

**【大谷委員】**

専門になって、3年生、4年生で研究室配属されると、それぞれの学生の顔が見えてきて、教員との関係ができてくると思うのですが、1年生、2年生は、研究室に配属される前ですから、全体を見渡して、問題のある学生がいなかったかとか、見るのも難しいというのが一般的ですが、この大学の場合は、1年生に対する教養ゼミというのを創設時からやっておられて、そこで1年生に対する把握をされるというのは非常にいいと思います。ただ、1年生から2年生に上がって、3年生へ行くときの受け渡しのところで、つながりがうまくいっているのでしょうか。評価書を見せていただいても、2年生あたりのところが、どっちつかずになっているような感じがするので、その辺の御苦労というのはありますか。

**【石森主任教授】**

2年生にはトピックゼミというものがございましてけれども、これは、学生の相談というよりは、一つの授業です。ただ、その担当者から、学生の出席が悪いとか、そういう情報を頂いたりします。

それから、専門と教養の間でまたゼミ担当者が変わりますが、学生カルテという電子的なものがありまして、そこに記録を残しています。次に担当される専門のゼミの先生とか、あるいは卒業研究の先生が、それを見ると、学生はどんな経歴でこのゼミまでやってきたのかがわかりますので、そういう意味では、情報が継続しています。つなぎとしてはそのようなシステムがあります。

**【表 主査】**

数学と物理で補習授業をされていましたが、それは何クラスぐらいやっているのですか。また、受講する学生の数はどれくらいでしょうか。

**【石森主任教授】**

数学については、2クラスですね。学科によって数学の重要さが違うのですが、機械システム・知能デザイン・情報システム3学科150人の定員の学生に対して、大体、1クラス20人掛ける2で40人ぐらいです。

入学式の後とか、あるいは2日目に、基礎学力テストを受けてもらいます。それを見て、これは高校の内容をもう一度しっかり学習しながら勉強したほうがいいなという学生はそちらのクラスに入ってもらいます。そういうものが2クラス。教員一人当たり20人と、非常に少人数なので、そのクラスの担当の先生にいろいろ相談するように、また、そのように指導していただけるように、私のほうから非常勤の先生をお願いしています。講師になっている方は高校を退職された先生なんですけれども、必ず打ち合わせをします。例えば三角関数が弱いと専門のほうからお聞きしたりもしたので、最初の公式から少し教えていただけませんかとか。グラフの書き方が下手だという場合には、グラフの書き方も一応教えてくださいます。大体、微分積分を中心にして、必要などころをお伝えして、それを教えていただくようにしております。最後の単位認定のときは、また打ち合わせしまして、出来具合とか、私の持っている科目との関係を見ながら成績をつけたりするのですけれども、そこでまた、いろいろお話しして学生の様子を伺っています。

物理は、何かありますか。

**【福原教授】**

物理も基本的に、今、石森先生が説明されたのと同じように、入学直後に基礎学力テストをやつて、点のとれない人は補習授業を受けてもらうという形でやっています。人数は正直、半分ぐらいは受けさせたいような感じはあるんですけれども、あまり大人数にすると教育効果が落ちます。1クラスがせいぜい35人ぐらい、それを超えないように、全体で、2クラスで70名ぐらいをマックスに、補習授業を義務化して受けさせております。

**【表 主査】**

半期でしたか？ 通年でしたか？

**【福原教授】**

前期だけです。半期です。大学の前期の授業と並行して、その補習授業をやります。

**【表 主査】**

私も、ほかの大学でそういう科目を設けたことがあるのですが、それが、どの程度成果を上げるかを見極めるのはなかなか難しいと思いますが、その点はいかがですか。

**【福原教授】**

最近そういうデータをとっていないのですが、何年か前に、基礎物理学を受けた学生等を含めて、大学の単位修得について統計をとったことがありました。そうすると、最初の入学後テストで、ある点数以下は受講することになるのですが、そのボーダーラインのちょっと上で、基礎物理を受けなくていい学生が一番落第したんです。そういうデータはあります。逆に、点が悪くて、基礎物理学、つまり補習授業を受けた学生は結構受かりました。だからそれを見て、結構役に立ったなと思ったことはあります。

ただ最近、そういう効果が、何年か前に調査したら少し曖昧になってきたかなという気はしているんですが、でも、実際には効果があると思います。

**【原口教授】**

物理の相談教室が1年だけ予算がつかなくて行えなかったときがありました。予算は競争的資金ですが、採択が遅くなり過ぎて行えませんでした。その年には明らかに単位の修得率が落ちていきます。

**【石森主任教授】**

現在は定着したものとして学長が判断して、予算を確実につけてもらっています。ただ、今おっしゃられた検証については度々言われています。



**【長谷部委員】**

理系の単科大学ということで、実験室であるとか、数学の先生の御苦労みたいなものというのをお聞きできたんですが、一方で、一般的に考えられるとすれば、語学が弱いのではないかということです。英語の教員の先生方及びドイツ語、中国語の先生方の御苦労というか、工夫みたいなものというのでしょうか。

**【中川教授】**

それでは第2外国語から、先に。週に1回で1年で終わるというカリキュラムです。

**【長谷部委員】**

必修ですか？

**【中川教授】**

必修です。ドイツ語ないし中国語を選択します。私自身は、理系の学生が理系の科目を理解し、それを復習したりするだけでも大変だと思っていますし、それに英語がありますから、できるだけ授業内に練習問題をするという方向でやっております。そういう意味では、あまりたくさん進めないです。ドイツ語の文法の骨子だけを1年間で身につけようと、発音とつづりの関係だけを頭にたたき込みます。ごく最低限の目標を掲げて、できるだけ授業中におさめるようにということで、何とかやっているという感じです。位置づけとしては、ドイツ語は、語学というよりは教養科目の一つとして続けざるを得ないかなと思いつつやっています。

**【中冨准教授】**

英語については、やはり本学は理系ということもあるのか、一番の特徴は、学生はあまり英語は好きではないということです。5年前にアンケートをとりましたら、7割の学生は英語が嫌い、あまり勉強したくないという。ただ、エンジニアこそ英語が必要なのであって、使ってもらわなければならないです。

それと、ゆとり教育の学生が入ってきてからは、ちょっと学生のタイプは変わってきています。私がここに来たころ（1999年）というのは、文法はある程度できたけれども、話すのは全くだめというのが非常に多かったんですけれども、今は逆で、話す、聞くはわりとやっていますので。リスニングはセンター入試にも入りましたし。

だから、話す、聞くはある程度やってきてこなれてはきているけれど、今度は文法とか読解力が非常に落ちているという状況です。その学生たちにどのように勉強させるかということ工夫しています。物理、数学のほうのリメディアル的なものですね。高校の復習をもう一度やるため、英語のほうでは思い切ってカリキュラムを変えました。1年のときから、本当にもう一度基礎に戻って、学び方から学びます。例えば辞書の使い方ですとか、電子辞書、紙の辞書の良さ、悪さから始まって、短文レベル、それから幾つかのセンテンスレベル、それから、1年では一つのパラグラフぐらいいまで書けるように。2年生では、もうちょっとそれを深く、広くします。3年生では、英語で学ぶという授業を展開しています。英語で学ぶ授業というのは、実は本学ではかなり昔からやっています。学生の質の変化、知識の変化にあわせて、今、そのような3段階のタイプに分けてやっております。

**【川腰委員】**

今のお話と少し絡んできますが、高校側から送り込むときに、どうしても理系なものですから、就職率よりも大学院への進学率の低さというのが気になります。それを考えたとき、やはり英語は、本当はもっと必要だろうと思いますし、今の本学の入試の仕組みでいいのかと考えるわけです。どうでしょうか。大学院への進学については、教養の問題だけではないかもしれませんが、進学率を

高める工夫などは何かなされているのでしょうか。

【石森主任教授】

そちらのほうは、工学部全体の自己点検評価書で研究科の入学選抜について意見が出ています。先ほども、私の教員室で、他大学の院入試数学の質問に来たとか、編入の話もさせていただきましたけれども、大学院を担当されている方に学生の進学のことについて、何かありますか。

【福原教授】

そうですね。外部に進学する学生は少ないです。本学の中では定員割れ等は起こしてないので、3分の1ぐらいは進学していると思います。やはり外部はちょっと敷居が高いんじゃないでしょうか。

【川腰委員】

もう一つよろしいでしょうか。気になったのは国際交流です。実は高校でも最近やはり、グローバル化の波に乗って、海外への研修などに、各校とも力を入れようとされているのですが、大学側では留学生を含めて、そういう工夫といたしますか、さらに考えておられるようなことはあるのでしょうか。

【石森主任教授】

教養教育の自己点検報告書では、教養教育に関係のある部分だけをお書きしましたので、情報が少なかったのですが、国際交流については国際交流委員からお話します。

【須田准教授】

ここ数年（2011年から）は中国の瀋陽化工大学への交換留学が夏休みに行われていました。英語圏への留学や研修ということにも要求がありまして、今年度からアメリカに4週間程度行くことになっています。

【表 主査】

それは単位認定されますか。

【須田准教授】

（中国への）交換留学の場合は単位認定されますが、アメリカの場合は語学研修ということですので、今はまだ単位認定されません。英語圏では、ポートランド州立大学というオレゴン州にある州立大学の語学コースに参加します。（単位認定については）次の段階になると考えています。

【原口教授】

事前にお送りした自己点検報告書は教養教育にかかわることだけでしたので、工学部全体の自己点検報告書に、瀋陽化工大学との交換留学制度にかかわる単位認定が書かれております。こちらの学生が本学で単位を認める語学研修という形、そして瀋陽化工大学の学生さんは、4年次の卒業研究に特別聴講学生として来られるということで、工学部全体とそれぞれの専門学科のほうに留学の制度が書かれております。

【長谷部委員】

私のほうで事前に留学制度について御質問させていただいたものですから、原口先生から、瀋陽工科大学との交換留学に関連するデータ等を事前にいただいておりますが。

せっかく、ここまでのいいシステムというか、制度ができて、それが今、効果を得られているという実感をされているのであれば、先ほど先生がおっしゃったように、英語圏といっても、これからは単純に英語をしゃべるというだけではなくて、英語に関係した工学的・理学的なものを実施されていらっしゃる学校が、アジア圏にあると思うんです。

それから、私自身が留学生と非常にかかわりの深い仕事をしております関係で、やはりインドネ

シアであるとか香港の学生なども、当然、個別性は非常に強いけれども、非常に優秀な学生もいたりします。

決して、国際交流は、割と身近な中国とかアメリカというだけではないので、もっと広い目でごらんになられることも必要かなと思います。どなたがリーダー的にやっておられるのかはちょっとわかりませんが、一人一人の教員の努力なども含めた、先生方の個別の個人指導の中からそういう方を受け入れていくというシステムとして、改良されたらいかがかなと思います。

**【石森主任教授】**

研究交流についてはほかにもいろいろありまして、タイとかベトナム、インドネシア、そういったアジアの国との研究交流の場というのはもちろんあります。

**【原口教授】**

工学部全体の自己点検報告書のほうに出ておりますが、例えばアラスカ大学、ペンシルバニア州立大学、タイのプリンス・オブ・ソンクラ大学、中国科学院、瀋陽化工大学、スリランカのペラデニア大学、インドネシアのタデラコ大学、ベトナムのホーチミン市工科大学ですとか、そういうところと学術交流しております。学科のほうでは、例えば専門の先生方がインドネシアなどに学生を連れていったりすることはありますが、直接、教養教育のほうの報告書には載っていません。

**【中川教授】**

このパンフレットを委員の先生方はお持ちですか。この、真ん中あたりに載っている女子学生は本学の学生ですが、官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」の第1期生に選ばれた1人です。

彼女のケースは、先ほど「個別の教員の努力によっても」とおっしゃられたこととまさに関係していると思います。例えば英語の中畠准教授のイングリッシュ・チャットのサークルにずっと出ていました。彼女自身、もともと語学とか、外国に行ったり、外国で働いたりすることに興味のある学生だと思いますけれど、中畠准教授のサークルに参加することで、そういう意欲や能力を高められた結果が「トビタテ」の選抜につながったと思います。

瀋陽化工学院の中国の語学研修もその前に行っております。これも彼女がトビタテに応募するための助走になったのではないかと思います。個人の資質に加えて、個別教員の努力、さらには本学の制度がそれぞれ助けあって上手く行った例と言えるでしょう。

**【中畠准教授】**

日本に住んでいると、英語で話す時間が全然ないのですが、英語は使わないと伸びませんから、少しでもその手伝いになったらいいと思い、イングリッシュ・チャットを始めました。週1回ですが昼休みに、昼食を食べながら、誰でもいいから話したい学生が来て、何でもいいからとにかく話すというものです。もうこの10年ぐらいやっています。実は、彼女は中川先生の教養ゼミ生です。英語に非常に興味があるということで、中川先生からチャットに紹介していただきました。彼女は、英語は嫌いだって言っていましたけれども、一生懸命やっていました。それでプログラムを紹介したら応募して、選ばれて、とてもいい結果になりましたね。

**【表 主査】**

ロシア語の科目はないのですね。

**【中畠准教授】**

ロシア語はないですね。ウクライナ人の非常勤の先生はいらっしゃいますが、ロシア語は教えておりません。

**【大谷委員】**

教養教育の自己評価書等を見させていただいて、教育理念や教育目標を書いているところに、今の話にもあったグローバルとか国際性の言葉はあまり出てこないのですね。さかのぼっていくと、シラバス、履修の定義のところには建学の理念がありますが、そこにも書かれていないですね。

だからここで話題にすることではないのかもしれないけれども、実際にこういう部分があり、成果も一部上がっていて、必要性なども感じておられるというのであれば、大学として、建学の理念などの一番大きなところにまずそういう文章を入れて、それを各学科が目標のところに入れていくという段取りなのではないかという印象がします。

**【原口教授】**

県民の大学でございますから。

**【大谷委員】**

いや、それはそれでいいと思います。それも一つの立場ですから。逆にそれをしっかり書いてあるのだから、国際化、グローバル化というのを受け身でも入れていくのかという、その判断がどうかという印象を持っています。

**【長谷部委員】**

多分、グローバル化とか、グローバルって何というようなところから含めた話というのは、我々の世代ではなかったと思いますが、今は避けて通れない状況にあると思います。国家戦略がそういう方向に向いている中で、富山県の位置づけや、当然そのベースになる学生の位置づけというのがあると思うので、せつかく実際にやっておられているのであれば、そういった調査や、広報の仕方はあっていいかなと思います。

今、大谷先生からお話があったように、ここへ来て、いろいろな先生方のお話を聞いていると、事実、非常に努力されているだろうということは伝わってきますが、それが自己点検報告書やシラバスの中には感じることはできなかった。多分、それが、我々委員の共通した意見で、残念ながら私も、国際交流というところに厳しい点をつけさせていただいた理由なのかなという気はします。

**【原口教授】**

なかなか、入学生の県内比率の問題もありますので。

**【長谷部委員】**

意識はどうなんですかね。私は高校で、授業をやらせていただいたことがあります。成田空港に近い高校だったので、比較的学生の意識なんかも高いのかなと思ったら、学生があまりそういうことを感じていなかったというようなこともあったりもして、ちょっとがっかりしたことがあります。志向性というのはどうですか。やはり、県内の企業に入る、もしくは、あまり外へ出て行こうというふうな志向性の学生というのはまだ少ないのでしょうか。先ほどの女子学生の例というのは非常に希有な例で、ほかの学生は、あまりそういうことはないのでしょうか。

**【佐藤教授】**

自分の担当した学生さんの話が全体に広がるかどうかは別としまして、こういう例がございます。瀋陽化工大学の留学した学生さんは、次は英語圏に行きたいというような気持ちがあるようです。それはどうしてかという、向こうに行ったら英語でやりとりするというわけです。今度は英語圏に行きたいと。そういう学生の意識があって、そういう学生は自分で語学研修へ行ったりします。今度、大学で制度をつくったわけですけども、そういう流れが一部にあると思います。おっしゃられるような流れは、僕個人は期待しています。

**【中畠准教授】**

今お話になったことと関連しますが、実際、瀋陽化工大学に行くと、学生はみんなびっくりす

るんです。中国人の学生はえらい勉強していると。これではだめだということで、帰ってきて、すぐ僕のところに飛んできました。1年生の英語の学生ですが、「びっくりしました。チャットに来ていいですか」と言うから、「ああ、いいよ」と。その彼が友達を2人連れてきて、3人で来るようになりました。そういった、ある意味のショック療法みたいなものもあります。

ただ、こちらが行くだけではなくて、あちらの学生にも来てもらいたいので、そこが問題で、結局、日本語という壁があるので、日本語という壁を取り払えば、もっといろいろな学生が来られるのではないかなとは思っています。見えない障壁になっています。

#### 【長谷部委員】

最近の留学生は、もちろん直留学、交換留学という形態で直留学ということもありますが、一部は、例えば地元の高校から日本語学校を通じて日本の大学に入るといった学生もいらっしゃいます。ただ、まだまだ学校の中にも、見えない壁というか、障壁があると思います。入試制度を取っ払って入学させることは難しいにせよ、そういった人たちの、特別枠というか、通常の入学試験とは違う入試判断みたいなものを入れて、多少、ショックを与えていくとかも必要かなと思います。

ある意味、小さい村社会のような学校であるがゆえに、異端者を排除するわけではなくて、逆に受け入れるという体制になれば、そこはすごく良くなるのではないかなという気がします。留学生の中には、そういう方たちも非常に多いので。私も、せっかくこういう機会外部評価委員を務めさせていただいたので、富山県立大学を知りましたし、この学校のいいところを、そういう留学生の人たちに教えていくための伝道師になりたいという気持ちではいるんですけどね。

#### 【石森主任教授】

理系の大学なので、授業は日本語でやっています。そして、その中で数学や物理の専門科目を学んでいく。日本語を全く使わずに卒業できるルートをつくるというのは、今のところ、大変難しいかなと。そういう大学は一部にありまして、スーパーグローバル大学に選ばれたりしていますが、そちらを目指すかどうか。法人化もあって、その経営陣の考え方もあるでしょう。グローバルな視点が入るかは、いろいろまた議論してみたいと思います。

#### 【長谷部委員】

秋田の国際教養大学はまた特別だと思うし、あのやり方だけがいいのだということでもないと思います。あれは新設校だから、思い切ったこともできたわけで。また、新潟の国際大学のように、民間の人たちがつくったから、外国人だけで授業が通用するということもあると思いますけれど、この大学は、この大学のももとの歴史もありますでしょうし、いい部分もあると思います。

留学生の方にも日本語できちんと理解できる方たちもいると思いますし、逆にICTプログラムなどは、国際的な共通言語になっていますので、日本語のレベルが通常の日本人より低くても通用する学部・学科はあるのではないかなという気はします。

#### 【表 主査】

時間が迫ってきましたが、今日はまだ議論されていない点として、教養教育のところでは、総合科目を担当されている先生方もいらっしゃるわけですね。総合科目に関して、何か御質問、御意見などございますか。

総合科目にはいろいろな科目が用意されているようですが、学内だけでは担いきれるものではないと思うので、非常勤講師をお願いすることも多いのではないのでしょうか。その場合、非常勤講師を探すことは、そんなに困難ではないですか。

#### 【原口教授】

非常に困難です。地方では、独法化後の国立大学から御出講いただくことが大変難しくなってい

ます。非常勤講師の確保に非常に困難をきたしています。かといって、教員を増やしてほしいと要望してもなかなかです。コンソーシアムで、単位互換も行っておりますけども、非常に苦労しているところです。

【長谷部委員】

それは人選ですか、それとも個別実地的な、教員に対する人件費とか、そういう経費の問題ですか。

【原口教授】

(科目担当が可能な)人がいないのです。毎年、時間割の問題もあって非常に苦労しています。来年も来ていただけるのかどうかとか。集中講義でしか来ていただけない科目もありますし。集中講義が増え過ぎると学生のためになりませんので、なるべく富山県内で探します。せめて金沢ぐらいからと思いますが、その教員を確保するのに非常に困難です。

【表 主査】

難しい問題ですね。ただ、総合科目は教養教育の一つの重要なポイントなので、そこにいかに力を入れるかということは大切な問題だと思います。そういう意味では、非常勤講師の確保が難しいということで、これからどういうふうにこの科目を運営していくかという問題点を、長期的な観点も含めて議論していただきたいと思っております。よろしいでしょうか。

では、質疑応答はこれで終わらせていただきます。

(委員、講評準備のため学科連絡室に移動)

◆講 評

【表 主査】

それでは、本日の予定の最後にある講評を行いたいと思います。委員の先生方からおひとりずつ講評をいただいて、最後に私の方で簡単にまとめさせていただくという形で進めさせていただきます。

それでは、順番にお願いします。

【川腰委員】

それでは、私から講評ということですが、感想に終わるかもしれませんが。御了承いただきたいと思えます。

私はどうしても高校側、つまり学生を送り込む側ということでこの大学を見させていただきますが、やはり本校に来ている生徒のレベルを上げるというか、もっと言うと、生徒がここを受験したくなるような大学に是非なってほしいと思います。そういった観点から、先ほども申し上げたように、やはり一つには大学院まで行こうという希望を持っている生徒の受け入れ体制ですとか、また、国際交流に対して、今後、大学全体で是非取り組んでいただきたいというのが、まずは感想であります。

それとともに、高大連携ということで、近年、高校では、大学との連携によってより専門的な内容を高校時代から経験させています。実は本校も今年から、県立大学とスーパーサイエンスハイスクールをやらせていただいているわけです。大学の先生方、非常にお忙しい中に、さらに加えての仕事ということで恐縮しているんですが、この点については御理解、そして御協力をぜひ今後ともお願いしたい。そういった面で、大学側との協議の窓口といったようなものを、できれば、常態的に設けさせていただくようなことができないのかなとも思っております。

話は少しずれるんですけども、私自身、本学の近くに長らく住んでおりまして、この大学は、

昔から、地域に対しても開かれたイメージがあったわけです。ただ最近のイメージは、大学祭にしても、いまひとつ、地域住民には広報されていないのかなというような感じも受けております。やはり学生、教員、そして子供、地域一体となるような取組みがもっとあれば面白いと思います。昔、大谷短期大学だった頃には、仮装行列をずっとやっていましたが、私はあのイメージが今も非常に強く残っています。最近、大学とこの地域の一体感が少し無いというイメージがあり、お話ししました。

最後に、やはり先ほどの大学院の話に戻りますが、いい生徒を集めるには、どうしても入試の仕組みというようなものは避けて通れない問題だろうと思います。英語の力のある生徒を集めるには英語のスキルが必要だと。ところがそうすると、一方では、富山県の非常に幅広い高校から受け入れていただいていると評価しているのに、逆にこの地域の生徒たちがなかなか入りにくくなるという心配もしています。そのあたりを、うまくバランスをとりながらも、私の立場から言えば、今後とも、是非、富山県の高校生をしっかりと受け入れていただきたいということでもあります。

以上であります。

**【表 主査】**

どうもありがとうございました。

それでは、大谷先生、お願いします。

**【大谷委員】**

大谷です。外部評価で、こういうところでコメントするのは非常に面はゆいですが。存じ上げている先生方もたくさんいらっしゃるのです。25年前から5年間お世話になって、その後20年間、別の、京都のほうの工科系の大学に移ってという、そういう経緯からして感じることもありますが、最初に石森先生のほうからお話ありましたように、この大学の教養教育の特徴というのは、組織として教養教育のセクションがきちんと残っているということです。私が20年前に行ったところでは、教養教育の組織が解体されて、各専門分野のところに分属になるということがありました。

20年を経て、教養教育の重要性というのは叫ばれて、もう一度本学でも教養について考え直すようとしているのですが、各専門学科にばらばらにされて十数年以上たったメンバーがもう一度集まって、大学全体の教養教育についてどう考えるかというようなことを議論しようとする、非常にそれは難しいです。組織としても、弱体化してしまうと、やはりだめだと思います。ですから、おっしゃるとおりそこを守ってこられたというのは非常に良いことであるし、特徴であるということで、ここにいらっしゃる方自身は、それが当たり前だと思っておられると思うんですが、実はそうではないので、教養教育として、こういうスタッフの皆さんが一つになって運営しておられるということがまれであって、非常に今重要なことで、追い風も吹いているということだと思つので、ぜひそのことは、まず意識をしていただきたいと思います。

もう一つは、では、一周回って戻ってきて、教養教育という話になっているのですが、今問題になっている教養教育というのは、20年前ぐらいに、あまり重要視されなくなった教養教育とは少し違っているわけです。いわゆるリベラルアーツ系だったものが、今、教養教育と言っているものは、特に工学系ですと能力といいますか、コンピテンシーみたいな話がメインになってきていて、学士力をつけるとか、そういう話になっているのですが、それにどういうふうに、この組織がきちんと残っている富山県立大学の皆さんが対応するかということが非常に重要であるのではないかと思います。

リベラルアーツとしての教養教育を守るという立場もあるでしょうし、現代的な教養教育に対するニーズに応えるために、コンピテンシー型にシフトするという部分もあるでしょう。それは皆さ

んの御判断だと思imasるので、今後どういふうに進んでいかれるかを注視したいと思っています。

それから最後、もう一つだけ言いたいのは、これは記録に残してほしいのですが、私が来たときの、きょうの出席の方々を見ていただくと、ほとんど人数がふえていない、減っていますか。

【原口教授】

いや、実数は増えています。

【大谷委員】

少しは増えている？ それはいいですね。

しかし、最初のころは160人の定員の学生の面倒を見ていたのですが、現在、230名を超えるような定員になっていると、多少数はふえてはいるのでしょうけれども、これだけのスタッフの先生方でやっておられるというのでは。しかも、創設時は1年生の教養ゼミだけだったのが、2年生にもトピックゼミというようなものを設定されているし、そしておそらくいろいろなGPをとっておられるので、それに対応した授業科目の設定なんかもあって、教養教育の先生方の負担というのは非常にふえているのではないかと僕には見えます。

だから、皆さん頑張って仕事をやってねというのではなくて、外部評価委員として、教養教育の先生方の負担が多いのではないかと、教員数が少ないのではないかとという意見があったということ記録に残していただきたいということでもあります。

今後とも頑張ってくださいと思います。ありがとうございました。

【表 主査】

それでは長谷部さん、お願いします。

【長谷部委員】

よろしく申し上げます。最初、冒頭に申し上げますのは、このような機会を与えもらったことと、御出席いただいた方々に感謝いたします。

やはり、このような機会があったからこそ、初めて富山県立大学ということを知ることができました。私自身は大学を卒業して30年間、ビジネス社会に籍を置いて、今は自分の会社を運営しているわけです。そうするとどうしても、経営者という立場の中で、新しい学生の姿や新卒の入社社員の育成というものを中心に考えているわけです。そういう中で、あまり私と接点がなかった富山県立大学ということを知ることができました。また、後で表先生のほうからお話があるかと思いますが、シラバスを拝見させて頂き、皆様方の教育というものに関する熱心さということに関しては、改めて感銘と申しますか、非常に感心をいたしました。

ただ、そういう中で、そういうものが一般的な評価とそれが相まっているのかということもちょっと気にはなりました。今、こういった世界ではありますから、貴学の評判が気になりました。例えば、ヤフー知恵袋みたいなもので拝見をさせていただくと、学生が、立命館大学と富山県立大学、両方受かったんだけど、どっちに進学したらいいかなというたわいもない質問が出ているわけです。そういうものの回答の一つ一つを読み込んでいくと、全体的には、やはり立命館大学に行ったほうが、それがいいよ、有効だよというようなことが書いてあると。

建学以来50年、大学施行されて25年という非常に歴史のある学校の中で、当然、非常に保守的な内容が芽生えていらっしゃる場所があると思imasし、いろいろな制約はあるかと思imasのですが、先程来、先生方も意見を言われているように、もう少し特徴というか、要は、もう少しとがったと言ってもいいんですかね、この学校はこういうことをやっているよというようなものをもう少しアピールされたらいいかなと。その中には、キャンパスライフに関連する冊子もあimasし、最近ではホームページもあimas。もう少し広報の方法を上手にされたらと思imas。これは別にお金



をかけるということではなくて、発信の仕方というのはほかにもあると思います。そういうものをもう少し工夫されたり、学生側から発信させるようなことをされてみたらいかがかなと。学生にそういうことを発信させるということが、学校に対するロイヤリティーであるとか、もっと言うと、例えば寄附金の増額とか、そういうものにもつながると思います。

やはり、いい学生をお出しになっておられれば、学生が学校に帰ってくる、学校に対する帰属意識というのはもっと出てくると思いますので、ぜひそういうものに力を入れていただきたい。もう少しとがった、特徴のある学校を目指されたらいかがかなと思います。

それから教員の方々の中で、非常勤講師の話もあったかと思いますが、大学の先生方の年齢層も40代、50代になっておられると思うので、そういった方々の級友や学友だとかが一般社会で成功されておられたりしますね。それなりに、こういう場で話をしたいというようなことをわりと喜んでやっている。これは当然、ほとんどボランティアですね。ボランティアでやっておられる方々に、ある一定期間授業を持たせるとか。そういうことを喜んでやられる方は、私の周りにも何名もいますので、ぜひ、そういうネットワークみたいなものも使われたらいかがかなと。

何となくこういう、行政庁側の配下にあると、一般公募が一番正しいような位置づけもあると思うのですが、決してそれだけではなくて、できれば推薦等々を含めて、外部講師というか、引き受けてくれる方々の選択みたいなものを増やされたら、もう少し違った特徴や目玉になれるのではないかなという気がしますね。

#### 【表 主査】

どうもありがとうございました。

最後に私から、総括講評という形で話をさせていただくことになろうかと思います。本日喉の調子が悪いもので、お聞き取りにくいところがあるかと思いますが、御了承いただきたいと思います。

最初に、本日の訪問調査と、それに先立つ書面調査をしていただきました委員の皆さんに、今回の外部評価に御協力いただきましたことに厚く御礼を申し上げます。

それでは講評のほうに移らせていただきます。私がこの評価委員を依頼されたときは、実は、外部の目で厳しい評価をしてほしいという意味の依頼を受けました。しかし、書面調査と、それから本日の訪問調査をさせていただいて私が感じたところでは、県立大学の方々の教育に対する取り組み、また教養教育の方々の教育に対する取り組みの熱心さには、率直に言って非常に感心しています。だから、期待されたような評価をできないというのは、ある意味で残念なんですけど、逆に言うとそれだけ感心させられたというのが本当のところなんです。私自身、ある大学の改革を依頼されて副学長をやらせていただいたことがあるのですが、そういう経験を踏まえての感想です。本学の特徴である少人数教育や、先ほど実験室とかセミナーの部屋なんかを見せていただいたのですが、これなども含めてカリキュラムが良く整備されているし、またきめ細かい授業がなされていると考えています。そういう意味で、大変感心しましたというのが率直な私の感想です。

それから、総括講評ですから、皆さんの意見を踏まえての話になるのですが、個々の内容に関しては、書面調査で十分になされていますし、また本日の質疑応答の中でも非常に充実した議論がなされていると思いますので、細かいことは割愛させていただくことにして、皆さんの意見の中で、大体、共通認識を持てた点について、私がまとめさせていただくことにしたいと思います。

といっても、私の独断と偏見が入りますので、皆さんの意見とは違うところもあるかも知れませんが、それは先ほどの席で委員の方々に御了解いただきましたので、独断と偏見が入っているということもご承知いただきたいと思います。

まず第1点として、これは先ほど大谷先生からもお話があったことですが、各学科共通の組織と

しての教養教育の組織があること、教養教育の理念及びその位置づけが明確になされていること、さらに専門教育との関連が示されていることは、非常に大きいことであり、高く評価できると思います。詳しい内容は大谷先生からお話がありましたので繰り返しません、ぜひこの組織を今後とも大事にしていただきたいと思います。

工学系の学生に、それ以外の教養をどういうふうに教育していくかは、それぞれの大学でいろいろ考え方はあると思いますが、それはその大学の教育に対する基本的な理念を表すものになると思うわけです。そういう視点で見たとき、この県立大学の教養教育の取り組みというのは、非常に意義が高いと認識しています。繰り返しになりますが、ぜひこれからも頑張って、この教養教育と基礎教育を、さらにもう一つ、導入教育も担当されているようですが、導入教育も含めて、ぜひ維持していただきたいと思います。

ただ、先ほどのお話で聞いたところでは、総合科目の非常勤講師の確保が非常に難しくなっているということもあるようですが、大学として教養教育の意義づけを明確にして、できるだけ大学全体として応援できる体制をとっていただきたいと思います。この点に関しては、これから学部のところでもお話しさせていただくことにしたいと思います。

第2点です。先ほども述べたことですが、学生の基礎力低下に対応して、教育体制とカリキュラム改革など、少人数教育の基本的な方針を堅持しながら、改革すべき点の改善が精力的になされてきたことは高く評価したいと思いますし、また、これだけの整備がなされたことには、驚きをもって感心しています。

その一方で、改革には多くの時間と努力が費やされたことと思います。これまでこういう大変な作業に取り組まれてこられた教養教育の方々に、ある意味での改革疲れというようなものが起きていないかという懸念を、率直な感想として持っているところです。大学の現場の実態は、書面審査だけではなかなかわからないのですが、大学の改革というのは、私の経験からも非常にエネルギーと時間を費やすものですから、そういう心配をしています。

いま述べたことに加えてもう一つの点として、改革が根づくのにはかなりの時間が必要である思うことがあります。その意味で、しばらく改革の根つき方を見るための時間が必要になります。また、カリキュラムの改革を、あまり頻繁に行うのは必ずしも良くないのではないかという点もあります。これまでなされてきた改革やカリキュラムの改編について、これまでの取組がどのような効果をもたらすかを見守る時間を持っていただいて、その検討の結果を踏まえて、改めて次の改革に取り組むというような考え方も、この際あったほうがよいのではないかと思います。

これは、あまり改革するなどと言っているのではなく、改革それ自体は非常に大切であるけれども、今までの富山県立大学の改革の歩みを見てみると、ここで少し様子を見る、あるいは根つき方を見守る時間も、必要ではないかと感じています。これはかなり独断と偏見に満ちた私見ですが、一つの意見として参考にいただければ幸いです。

以上、私の私見を含めての総括講評です。

#### 【石森主任教授】

どうもありがとうございます。

今日は表主査をはじめ、委員の皆様、貴重な意見をたくさんいただき、ありがとうございました。書面調査、質疑応答、そして、ただいまの講評でいただいた御意見を、外部評価報告書としてまとめ、今後の改善に生かしていきたいと思います。

委員の方々には、今後も報告書の確認などの作業がありますけれども、どうかよろしく御指導いただきたくお願いいたします。本日は、まことにありがとうございました。

きょうは、この上の教授会室で工学部全体の外部評価がありますけれども、主査以外の方もオブザーバー席がありますので、もし御関心があれば御出席ください。 — 了 —

訪問調査 および 学内視察



訪問調査趣旨説明



表 主査



大谷委員



川腰委員



長谷部委員



教員研究室



学生相談室



アクティブ・ラーニング室



物理学実験室



質疑応答



## IV 外部評価を受けて

## 外部評価を受けて

教 養 教 育

主任教授 石森 勇次

## 1 外部評価委員の意見等について

## (1) 学習・教育目標

教養教育の理念および目標が明確に示されている点が高く評価された。またその中で、専門教育との関連が示されている点や内容の周知・公開されている点も評価された。一方、もう少しグローバルな視点を加味すべきとの指摘を受けた。グローバル（国際化）な視点とローカル（地域課題）な視点については、そのバランスを含め、今後の全学的レベルの検討内容を踏まえ改善につなげたい。

## (2) 教育研究組織

教養教育を組織として担う体制ができていない点が高く評価された。また学科会議等の学科運営や構成員の分野のバランスについても評価された。今後もこの体制を維持・発展させ、社会の変化や要請に応える教養教育を実施していきたい。

## (3) 教員及び教育支援者

専任教員の年齢と男女比率のバランスの悪さの点で、課題を指摘された。新規の教員採用の機会を通じて、必要な専門分野や教員の質も考慮しつつバランスの良い教員構成にしていきたい。また、教育効果の点でTAの活用を評価された。今後も教育の場として活用していきたい。

## (4) 学生の受入

アドミッション・ポリシーが明確に定められ教養教育としてそれを受けた対応を行っている点および入試関連業務の主要な役割を果たしている点は評価された。一方、県内出身者の確保や入試関連業務での業務負担の公平化の課題を指摘された。全学的レベルで検討し、改善していきたい。

## (5) 教育内容及び方法

総合科目・基礎科目・外国語科目群に体系的に分類され、少人数体制を堅持して学生の実態に応じた丁寧な教育内容・授業形態・学習指導となっている点は高く評価された。一方、入学生の学力や気質の変化に対応するためには、今後もアクティブラーニング等の新たな授業形態への取り組みも含め、不断の対応と検証が必要であるとの指摘も受けた。

## (6) 学習の成果

学生への授業アンケートの実施による検証やFDでの情報共有・意見交換が継続的に行われている点および教養ゼミの学生を対象としたきめ細かな履修指導は評価された。一方、大学院への進学で低い評価を受けたが、卒業後の成果については就職後も含め教養教育・キャリア教育・専門教育が連携して全学的な教育課題として考えていきたい。

## (7) 学習支援、進学就職支援

学習支援については、ガイダンス・学習相談・助言等小規模大学の特色を生かした丁寧な対応を評価された。進学就職支援については、教員・職員の努力による高い就職率の維持について評価されたが、大学院への進学面での支援がもっとあってもよいとの指摘を受けた。

## (8) 施設・設備

本学の開学から25年目となる中で、施設の老朽化に対応するため継続的に改善のための予算



措置等を求めていく必要があるとの指摘を受けた。

#### (9) 教育の内部質保証システム

授業アンケートによる学科内FD、非常勤講師を含めたFD、企業・社会人からの外部講師依頼等による教育改善活動が評価された。また、環境教育プログラムやトピックゼミを教養教育と専門教育の教員が協働して行っていることも評価された。なお教育内容の向上には個々の教員の研究者としての知見の深さや研究に取り組む姿勢も重要であるとの指摘を受けた。

#### (10) 研究活動

授業等の様々な教育活動、学内業務を行っていることを考えれば、研究活動の全般的状況は水準を満たしているとして評価された。一方、各教員の分野が多岐にわたるので教員間で研究内容を知る機会を設ける等、相互評価が機能する雰囲気作りが大切であるとの指摘を受けた。また、外部資金として科学研究費の採択率を上げる取り組みの必要性も指摘された。

#### (11) 地域連携の推進

公開講座・県民開放授業・高大連携事業等については高く評価された。一方、共同研究や産学交流については低い評価となった。教養教育教員の研究分野からみて難しい点もあるが、研究関連での地域連携の促進に努めたい。

#### (12) 国際交流

教員の国際会議等への海外出張が活発に行われていることは評価された。なお教員の海外留学をさらにすすめるためにはサバティカル制度の導入等の検討が必要との指摘を受けた。一方、留学生の受け入れについて、定常的に入学するような工夫が必要との指摘を受けた。

#### (13) 自己点検評価

適切に取り組んでいるとの評価を受けた。一方、自己点検評価のその後の改革への生かされ方の検証や点検疲れを起こさないような工夫をしながら長期的な視野に立った改革の必要性の指摘を受けた。

## 2 まとめ

書面調査の結果、評価委員による差はあるものの概ね高い評価が得られたものは「1 学習・教育目標」、「2 教育研究組織」、「8 教育の内部質保証システム」、「9 教育情報等の公表」であった。一方、特に評価が低かったものは「1 2 国際交流」であった。国際交流の低評価の原因は主に留学生の受け入れ実績にあるが、教養教育の自己点検では教養教育に関わるものしか記述しておらず、大学院を含めた学部全体についての記述がないことによる情報不足も影響した。今後の外部評価では、点検項目によっては教養教育の自己点検だけでなく学部全体の自己点検も含めた資料も評価委員に配布する必要があると考える。

訪問調査での学内視察および質疑応答では、ゼミ・学生実験・学習相談等のより詳しい実態について評価委員に説明を行い、教員の教育に関する熱心さに対して高い評価を得た。また講評では、教育体制とカリキュラム改革等、少人数教育の基本的な方針を堅持しながら、改革すべき点の改善がなされてきたことが高く評価された。一方、高校・地域との連携、広報活動での学生の参加、卒業生も含めた外部講師の利用等で助言もいただいた。また今後の教養教育をリベラルアーツ（教養）とコンピテンシー（学士力）のバランスの点で、どのように対応していくのかという課題も指摘された。これは教養教育とは何かという根本的な課題であり、現在の在り方でよいのかどうか社会的状況や学生の状況等も踏まえて全学的な中期的・長期的課題として考えていきたい。

今回の様な外部評価は7年に1回行うものであるが、平成27年度4月には本学の法人化が予定さ

れており、今後は公立大学法人としての外部評価もある中で、講評でも指摘されたような改革疲れがないよう落ち着いて改革に取り組んでいきたい。



# V そ の 他

訪問調査当日配席図

教養教育外部評価訪問調査 配席図

日時：2014年10月24日（金）13:10～15:00

場所：富山県立大学工学部教養教育会議室

	川腰善一	表實	大谷芳夫	長谷部裕樹	
	委員	主査	委員	委員	
石森 勇次 (主任 数学)	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 100%;"></div>				原口 志津子 (芸術学)
佐藤 幸生 (生物学)					福原 忠 (物理学)
中川 佳英 (ドイツ語)					上谷 保裕 (物理学)
バデューチ ドミニク (英語)					室 裕司 (物理学)
中尾 崇 (英語)					川端 繁樹 (化学)
須田 孝司 (英語)					川崎 正志 (化学)
山崎 大介 (英語)					戸田 晃一 (数学)
川上 陽介 (日本文学)					土井 一幸 (数学)
	井戸 啓介 (心理学)	岡本 啓 (健康科学)	平野 嘉孝 (経済学)	濱 貴子 (社会学)	

廊下

